

薩南十島調査とその後への影響

The Attic Museum Investigation of the Satsunan Jitto and Its Later Influence

羽毛田 智幸

HAKETA Tomoyuki

要 旨

本稿では、アチックミュージアムが昭和9年5月におこなった薩南十島調査について、神奈川大学日本常民文化研究所に保管されている薩南十島調査にて撮影されたアチック写真・アチックフィルム『十嶋鴻爪』、および参加者が調査終了後に各種の媒体で発表した文献をもとに、調査団を組織のあり方や、各島々における調査活動内容や得られた成果についての検証を試みた。加えて、これまで「TEAMワークのハーモニアスデヴエロップメント」ということばでひとくりにされがちであったアチックミュージアム（以下、アチック）の活動に対して、薩南十島調査が与えた影響についての考察を試みた。

昭和9年5月におこなわれた薩南十島調査は、アチックから「彙報」や「ノート」といった形では報告がでておらず、調査の詳細について不明な部分も多かったが、本稿の調査において、鈴木醇や宇野円空、九州帝大の小出満二や木村修三、竹内亮、江崎悌三、鹿児島高等農林学校の谷口熊之助などの調査報告を確認することができた。これまであまり知られることのなかったこれらの調査参加者の成果は、アチックの薩南十島調査について、その行程や各参加者がどういった視点を持って調査に臨んでいたのかを些少ではあるが明らかにすることに繋がった。

また、「TEAMワークのハーモニアスデヴエロップメント」という渋沢のことばが、近年アチック全体を語る上では必ずといってよいほどに引用されてきた。アチックの活動方針の理想を述べたこのことばは、昭和10年7月発行の『アチックマンスリー』創刊号に「アチック根元記(一)」として掲載されたもので、理想をもって運営してきたアチックであるが、以後についてはそれをあらためるといふ渋沢の意思表示であった。

すなわち、渋沢や知友の研究者によって進められた玩具収集や奥三河の花祭調査などが中心であった昭和初年のアチックと、同人による各地の調査をはじめとする昭和10年代のアチックの活動をひとくくりにはできないのである。渋沢の具体的な言及はないものの、アチックに在籍しない自然系の研究者を含めた調査団を組織しておこなった薩南十島調査が転換点となり、その経験と結果によって判断がもたらされたのである。

【キーワード】 民俗映像、薩南十島（トカラ列島）調査、古写真
アチックミュージアム研究

1. はじめに

本稿を進めるにあたり、まず筆者の立場を明らかにしておきたい。筆者は平成 21 年（2009）の国際常民文化研究機構の発足時より平成 23 年（2011）7 月末まで、その第一業務「所蔵資料の情報共有化」事業のうち、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する「アチック写真」について、画像のデジタル化と目録作成業務を研究補助者として担当してきた。その後、本務が変わり、一度は同業務を離れたものの、平成 24 年（2012）度より現在に至るまでは、ふたたび同機構共同研究グループ 4-1「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」の共同研究者として参画している。

アチック写真のデジタル化や目録作成業務は、平成 21 年（2009）の本機構の発足以前にも神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の中で予算措置が講じられ、デジタル画像や目録の作成が徐々に進められてきた。これまで COE での成果については、同プログラムの共同研究や刊行物を通じてその一部が紹介されてきたが⁽¹⁾、このような長年にわたる地道な資料整理作業が本機構における業務の前段にある。資料の公開や利活用といった観点からは、資料所蔵機関として、その整理や目録化はおこなわなければならないことではあるが、ややもすると研究成果ばかりが取り上げられこのような地道な作業は等閑視される。しかし、およそ 9,000 枚におよぶ、80 年近く前の調査で撮影されたアチック写真の被写体について、ひとつひとつ詳細な情報を付与していく作業は、単に予算を投じれば解決するような生易しい作業ではなかった。渋沢敬三（以下、渋沢）個人の著作やアチックミュージアム（以下、アチック）から刊行された各種の文献、調査に参加した同人の著作、アチック写真や 16 ミリフィルム（本共同研究では「アチックフィルム」と呼称）との被写体比較を経て得られる情報、これらを総合的に判断して写真を読み解き、目録の各項目を充実させていく必要があったからである⁽²⁾。今日の私たちの共同研究では、おもにアチックの薩南十島調査（昭和 9 年）や台湾パイワン族調査（昭和 12 年）を取り上げているが、共同研究者に提供された両調査の基礎的な情報も、目録作成業務の過程で得られた多くの情報が含まれており、そうした地道な作業なしでは成立しなかったものである。

さて、現在でも多くの学術調査の際には、資料として記録として写真や映像が撮影されている。今では撮影後すぐにその内容が確認でき、撮り直しや消去が自由自在なデジタルカメラ・デジタルビデオカメラが全盛となり、多くの場面でそれ以前に主流であったフィルムカメラを駆逐した。また容量の大きな記憶媒体の登場により、ほぼ無制限に撮影することが可能な時代ともなっている。また、高解像度で高画質な印刷に対応できるだけでなく、撮影日時はもちろん、撮影画像に全地球測位システム（GPS）による位置情報が付加されるデジタルカメラ等も安価でかつ一般に入手可能なものとして流通している。フィルムの残り枚数を気にすることなくメモ代わりにシャッターを切ることができる手軽さのいっぽうで、1 枚 1 枚の写真や撮影に対する比重は軽くなっている面もあるだろうし、撮影した画像データの長期保存や、モニター上と紙焼きの間の色の再現性等については課題を残すものの、今や従来のフィルムカメラはデジタルカメラにその位置を取って代わられている。

さらに、全世界的なネットワーク環境の整備によりデータ共有手段の多様化が進み、写真や映像の保存や公開環境も変わりつつある。かつてはフィルムの現像、紙焼き、アルバムへの収納、撮影情報の記入といった整理を行い目録や写真集等の書籍媒体によって情報を公開していた。デジタル画像であっても資料保存機関が独自にデータベースを作成し公開していたものが、現在では機関を超えて多くのデータベースを統合して検索をすることが可能となっている。

映像については、8ミリや16ミリフィルムからテレシネされたVHSテープでの視聴やデジタル化した映像のデータをDVD等のメディアに収めていたものが、現在ではデジタル化されたデータをアップロードし、ウェブを通じて多くの人々に配信・共有されるものとなりつつある。一般利用と学術利用をひとくちにまとめることはできないが、写真や映像をめぐる環境が多くの面で変化しつつあることは確実である。

日付順に並べたフォルダに入れただけの、筆者自身の膨大な未整理のデジタル調査写真の山を棚に上げておきながら稿を進めるのはいささか気が引けるが、他人が何らかの意図を持って撮影したアチック写真に第三者によって情報を付加すること、ウェブを通じてそれらを発信し、再び研究その他の素材としての活用を促進するという試みに携われたことは、民俗学を志す者として、また博物館という資料保存に携わるものとしてこの上ない貴重な経験であった。

本稿では、アチックミュージアムが薩南十島調査においてどのような活動をおこない、どういった成果を獲得したのかという点について、アチック写真やその整理の過程で得られた各種の文献をもとに検証し、いわゆるこれまで語られてきたアチックミュージアムというものに対して同調査がその後の活動にどのような影響を与えたのかを考察してみたいと思う。また、調査が行われてからおよそ80年が経過しようとしているが、同調査についてはアチックからの報告書等が出ていない。ここで調査参加者による報告をはじめとした各種の資料を集大成することによってそれに代えるとともに、今後のアチック研究の一助となれば幸いである。

2. アチックミュージアムの“語られかた”

1) アチックミュージアム研究のこの10年

アチックを通観するまとまった成果として、これまでは平成13年(2001)に国立民族学博物館にて開催された企画展の図録を兼ねて出版された『図説 大正昭和 暮らしの博物誌 民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』、平成14年(2002)に横浜市歴史博物館と神奈川大学日本常民文化研究所が主催した特別展『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問—』の図録が参照され多く引用されてきた。どちらも博物館展示の図録として編集されたものであるが、そこには多岐にわたるアチックの活動(渋沢個人の幼少期からアチックの活動に至るまでの経緯を含む)が取り上げられている。前者のあとがきで著者の近藤雅樹氏が「渋沢敬三とアチック・ミュージアムの全容をとらえることは容易ではない。(中略)改めて敬三という人のスケールの大きさを痛感した」と述べている。これについては近藤氏のみならず、筆者も含めてアチックの活動について何らかの問いかけをしようとした多くの研究者が感じることだろう。ここでは紙幅の都合上、渋沢についての詳細を述べることは控えるが、まことに渋沢やアチックを概観することは容易ではなくこれには筆者も同意するところである。しかしながら、平成25年(2013)こそ渋沢没後50年ということで記念事業が多数おこなわれたものの、近年の渋沢やアチックをめぐる新たな資料の発掘や調査研究は低調であった感は否めない。

2) アチックを語るキーワード「チームワークのハーモニアスデヴェロップメント」

前出の展覧会以降この十年余り、渋沢とアチックをあらわすためによく用いられてきたキーワード・表現として、「チームワークのハーモニアスデヴェロップメント」ということばがある。これは渋沢が自身の文章の中で著したものであるが、近年ではこのことばが文脈から切り離され独り歩きをしているくらいがあるのでここでもう一度原典を確認しておきたい。渋沢がこのことばを著

したのは『アチックマンズリー』第一号に掲載された「アチック根元記（一）」の中である。アチックマンズリーは昭和10年7月30日にその第一号が刊行された。渋沢や同人の動向などアチックの社内報といった内容から、論考や調査報告などの充実した誌面で構成されている。渋沢はもとよりアチック同人やそこに集う人々の様子がうかがわれ、アチック研究史上では欠かせないものであり、少し長くなるが全文を引用しておきたい。なお、引用に当たっては可能な限り歴史的仮名遣い、旧字体など、原典に忠実に表記するように努めている（以後、引用については同様）。

民具の蒐集も悪いことではない漁業史の研究も良いことだ。文献索隠其他の出版も不都合なことではない。然し自分は時々思ふ。有爲の若い人々にこんなに集まって頂いて而も自分自身が暗中模索的態度しか取り得なくつて果してよいのだろうか。人を一緒にして却つて一人一人の力を弱めてはいただろうか。アチックの存在はたとへ夫れ自身が独自であるとしても而も自分の意志が多分の力を加へて居ることは否めない。之を想ひ、且つ之の意思が多くの人々の運命をして不都合な歪さえ受けしめて居るのではなからうかと考へる時慄然たらざるを得ない。然も尚ほアチックの存在を是認しつゝあるは何故か。何を自分はアチックに見出さんとしつゝあるか。人格的平等にして而も職業に専攻に性格に相異なつた人の力が仲良き一群として働く時その總和が數學的以上の價値を示す喜びを皆で共に味ひ度い。チームワークのハーモニアスデヴェロップメントだ。自分の待望は實に是れであつた。アチックを研究所のみにしないのも、又單なる座會のみにしないのも、又更に單にテクノクラシー的な効果のみを追はしないのも畢竟その所以は之にある。然し振り返つてアチックの過去を追憶し眼を現在迄廻轉させた時自分としては云ひ知れぬ自己の我儘な暴逆とその責任を感じ暗い重いかたまりが胸を打つ。たとへその思想は許されるにしても成果の上に暴露された力なきみじめさを觀^マて。今の自分としては陶淵明の悟^マ已往之不諫 知來者可追の句は單に口ずさむ丈ではゆるさないのだとつくづく思ふ。

近年では、アチックの活動のあり方を総称するかのようこの「ハーモニアスデヴェロップメント」が引用されているように見受けられる。民具、古文書、水産史、絵引、博物館といった渋沢が何らかの形で携わつた学問の枠に括り難い多岐にわたる活動が学際的な志向と見なされ、多くの同人とともに展開されたことに対して「ハーモニアスデヴェロップメント」と解されているのであろうか。もしそのような解釈であればそうではないだろう。この文章から読み取れることは「自分の待望は實に是れであつた」と学際的なアチックの運営に意義を見出しつつも「振り返つてアチックの過去を追憶し眼を現在迄廻轉させた時自分としては云ひ知れぬ自己の我儘と暴逆とその責任を感じ暗い重いかたまりが胸を打つ」と述べているのである。これ以前のアチックではまさに志向した「ハーモニアスデヴェロップメント」を實踐したものの、アチックマンズリー発刊の昭和10年7月の時点ですでに「その思想は許されるにしても成果の上に暴露された力なきみじめさを觀^マ」ていたのである。さらに陶淵明の「悟^マ已往之不諫知來者可追^{いおうのいさむまじきをさとりらいしやのおうべきをしる}」を引き合いに出し、過ぎ去つたことを悔やんでも仕方がないが、これからのアチックの将来を何とかしようと思つただけではすまされないと述べているのである。これは理想としての「ハーモニアスデヴェロップメント」を認めつつも、實際のアチックの運営上ではそうはなつてはならず、過去を悔やみつつもその後の活動方針の轉換を示しているのである。

この部分について、アチックの実態に即して解釈した論考は管見の限りでは見当たらないが、こうした文章をあえてアチックマンズリー発刊の冒頭（図1）に寄せるに至つた背景には、昭和9年5月の薩南十島調査があると考えられる。この調査を例に上の文章を読み解くならば、「人格的に平等にして而も職業に専攻に性格に相異なつた人々」は、学際的な調査団を組織するために集ま

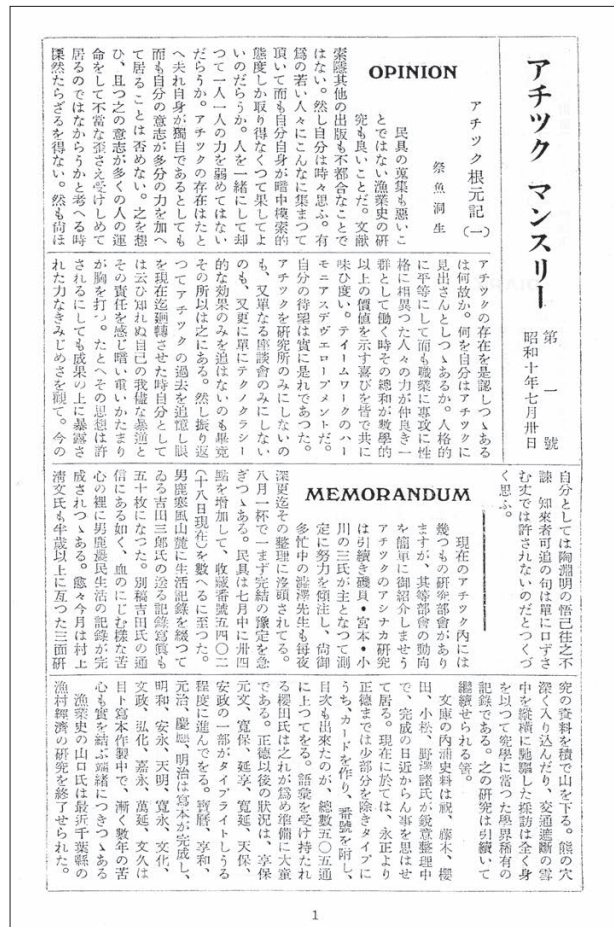
た総勢 20 名を越えるメンバーである。すなわち渋沢の知友である鈴木醇をはじめとする帝大教授陣や奥三河の本郷町長であった原田清、まだ立教大学の学生であった宮本馨太郎や当時武蔵野鉄道の役員であった高橋文太郎等のアチック同人であった。このメンバーで実施されたアチック最初の学術調査はまさに「自分の待望は實に是であつた」わけである。しかし、450 枚近くのアチック写真と『十嶋鴻爪』と題されたアチックフィルムが遺されたものの、その後のアチックで見られるような成果報告書はまとまることなく、繰り返しになるが「その思想は許されるにしても成果の上に暴露された力なきみじめさを観」たのである。

いっぽうで、昭和 10 年代に入るとアチックは彙報やノートといった刊行物による成果を世に出し始め、「資料を學界に提供する」という面では隆盛期をむかえることになるが、小林光一郎氏が指摘するように薩南十島調査のような学際的なメンバーを集めての共同調査はその後、岩手県の南部石神以外では行われていないのである [小林 2014 :

142]。瀬戸内海や朝鮮多島海でもおこなわれた共同調査に参加したのは、真に学際的なメンバーではなくあくまでアチックに席を置く同人か、現地での案内を担当する渋沢に縁故のある人間がほとんどである。もちろん、経済人としての渋沢の人脈を活用してのこうした共同調査は他に類を見ないことであり、アチック研究には欠かせない視点である。しかしながら、後の学会連合による共同調査などの嚆矢として取り上げられることが多い昭和 9 年の薩南十島調査であるが、昭和 10 年代のアチックでは、学際的な共同調査が行われていないことは明らかである。「単に口ずさむ文ではゆるさない」とした渋沢の採った手段は、学際的でハーモニアスではないアチック同人が中心となつての共同調査であり、単純に「嚆矢」として捉えることで、昭和 10 年代のアチックの活動を理解する上で不要なバイアスをかけてしまう恐れがある。こうしたことから、このことばを戦前のアチックについて時期の区分なく（あるいは考慮せずに）使用することは控えなければならない。ロンドンより帰国して以来、花祭調査を初めとした昭和初期と薩南十島調査後の昭和 10 年代以降のアチックの活動をひとくくりにはできないのである。

もうひとつよく引用される渋沢のことばに「論文を書くのではない、資料を學界に提供するのである」というものがあるが、こちらは昭和 12 年 8 月に刊行された『豆州内浦漁民史料』上巻の「本書成立の由来」の中で「古文書の整理」と題した文章の中に出てくるものである。恣意的な選択を極力避け可能な限りの古文書を活字として出版するとしたこの文章は、昭和 7 年に糖尿病の治療のために滞在した伊豆内浦での古文書の発見やアチックでの整理、のちの出版にあたっての姿勢や指針を示したものである。このことばもアチックの実態に則した解釈ではなく語感の良さや響きで

図 1 渋沢敬三「アチック根元記（一）」
（『アチックマンスリー』第 1 号より）



使用されることが多いが、古文書の発見自体は薩南十島調査以前であるものの、ことばとして世に文章が送り出されたのが昭和12年と遅いことから、ここでは紹介のみにとどめ稿を改めて原典の確認を行いたい⁽³⁾。

3) アチックミュージアム史研究にあたって

この十年あまりで前出の書籍によってアチックの活動が伝えられたいっぽう、渋沢のことばが独り歩きしているように感じられる背景には、アチックミュージアムの活動実態についての基礎的な研究が進んでいない中で、幅広いアチックの活動を都合よく端的に理解するためのキーワードが求められたように推察される。アチック＝渋沢、民具研究、足半、おしらさま、絵引、民族学博物館、豆州内浦漁民史料などと、従来注目される機会の多かったテーマは多岐にわたるアチックの活動のうち的一部分に過ぎない。アチック写真の整理の過程においては、薩南十島調査はもちろん朝鮮多島海や瀬戸内海など、渋沢や同人を中心におこなわれたさまざま調査を追いかけることとなり、多くのアチック同人による文献や資料を紐解くこととなった。その結果、ハーモニアスでもなく学界に資料を提供するのみでもないアチックの姿を認識するに至ったのは当然の結果といえる。そうした認識をもとに、今後はアチック史についての調査研究を進めていかなければならないと考えている。

3. アチックミュージアムの薩南十島調査

1) 調査に至るまでの経緯

渋沢は昭和28年5月20日付けの朝日新聞にて「二十年前の薩南十島巡り」(『澁澤敬三著作集』第五巻所収)として薩南十島調査について前半部分で次のように述べている⁽⁴⁾。

今からちょうど二十年前、昭和九年五月、ようやく待望していた百五十トン・セミ・ディーゼルの十島丸がこの村の島々を専門に就航することとなったのが、われわれの十島行きが実現した一番の契機であろう。

十島丸利用を基とし各般の準備をされ、かつ東道の労をとられたのは当時の鹿児島市鶴嶺女学校の永井龍一さんと、一行の主な方々は農学方面で那須皓、小出満二、木村修三、谷口熊之助、生物学で江崎梯三、竹内亮、岩石学の鈴木醇、宗教学の宇野円空、人類学で三宅宗悦、民族学方面で桜田勝徳、早川孝太郎、高橋文太郎、宮本馨太郎、地理学の小川徹の諸先生で、それに私ほか二、三人が加わった。中にはもう三、四の物故者も出ている。

巡った島は鹿児島を出てまず竹島を振り出しに、硫黄島、口ノ永良部島、平島、口之島、中之島、諏訪之瀬島、宝島、子宝島等で、最後に奄美大島名瀬に入港、今度は自転車で陸路住用を経て古仁屋に至り、眼前の加計呂間島に渡り諸鈍等を訪れ、ついで回航してきた十島丸にまた便乗、瀬戸内を出航、途中宇検や大和浜にたちより、いろいろ調査のうえ名瀬にもどり一段落をつけ、帰途は数日乗り回し懐しくなった十島丸の出帆を見送り、今度は三千トン級の嘉義丸で鹿児島に直航した。

アチック最初の共同調査といわれる薩南十島調査は昭和9年5月におこなわれた。渋沢が回顧するように、これは前年に就航した村営の汽船十島丸の存在や、以前大島支庁に勤めていた永井龍一の働きかけによって実現したものである。永井から当時九州帝大の小出満二のもとにいた早川孝太郎を経由して渋沢は、海が荒れて郷里の黒島へ上陸できず、三度鹿児島と名瀬を往復してしまい

旅費がついた退役軍人の話を聞いており、その事が薩南十島調査を決意させた一要因でもあろうとも桜田勝徳は推測している [桜田 1979 875]。また「長い間学者の眼がとどかなかった地域であるから、いろんな領域の人を誘ってみよう。大ぜいで行く程永井さんは喜ぶにちがいないし、大ぜいの眼で見れば、十島を多少とも幸せに近づける妙案をつかむ端緒を得られるかもしれない。大体そんな事で一行の顔ぶれが決まったのではなかろうか」とも述べている [桜田 1979 877]。早川も「十島の探訪には (中略) 決して簡単なただあまり知られぬある境域の一事一物を究めようというだけではない。十島丸の定期航路は村民に大なる恵みであるが、これからは日増しに古い事物が減じてゆくであろう。少なくともここ数年の間に都市の製品がうんと移入されるに相違なく、よくそれを償うだけのものを村から出し得ようか。このことを大いに考えて島の人達のためにも祈らなければならぬ。」とその調査背景を述べている [早川 1976 215]。

2) 調査参加者の顔ぶれ

薩南十島調査の参加者は渋沢の回想の他に後に紹介する宮本馨太郎の『十島雑綴』に挟まれたメモ書き、および『ドルメン』7月号の「奄美十島學術探訪團」(図2)に見られる名前を書き加えてみると次のようになる。(カッコ内肩書き・専門は同誌をもとに筆者が修正した)

- | | |
|-------------------------|--------------------|
| 永井 龍一 (鶴嶺高女) | 永井 亀彦 (鹿児島一中) |
| 小出 満二 (九大・農業史) | 木村 修三 (九大・農業経営) |
| 江崎 悌三 (九大・動物学) | 竹内 亮 (九大・植物学) |
| 谷口熊之助 (鹿児島高農) | 鈴木 醇 (北大・岩石地質) |
| 三宅 宗悦 (京大・人類学) | 宇野 円空 (東大・宗教民族学) |
| 那 須 皓 (東大・農政学) | 原 田 清 (三河本郷町長・民俗学) |
| 大西 伍一 (大日本聯合青年団郷土資料陳列所) | 村上 清文 (アチックミュージアム) |
| 早川孝太郎 (民俗学) | 桜田 勝徳 (民俗学) |
| 高橋文太郎 (民俗学) | 小川 徹 (地理学) |
| 宮本馨太郎 (服飾研究) | 渋沢 敬三 (民俗学) |
| 沼口 武久 (鹿児島県庁) | 榎並 喜義 (大阪朝日新聞社) |
| 南 義 友 (大阪毎日新聞社) | 文 園 彰 (十島村村長) |

以上である。後に紹介する調査参加者による報告ではおおむね 20~24 人の参加者とされているが、これは鹿児島県庁沼口氏以下の 4 名を含むかどうかの違いであろう。この薩南十島調査の参加者については、「敬三と同級だった鈴木やアチック同人といった敬三旧知の研究者と、敬三の研究に影響を与えた石黒忠篤の人的ネットワークに基づく研究者の参加という特徴」や、「アチック同人らの民俗学を含めても研究領域の重複が少ない人員構成となっている」ことが小林光一郎氏によって指摘されている [小林 2013 135]。薩南十島調査をもっとも早く全国に報じたとみられる『サンデー毎日』昭和 9 年 5 月 27 日号では「アマチュア民族学者として知られてゐる第一銀行常

図2 『ドルメン』7月号の「奄美十島學術探訪團」

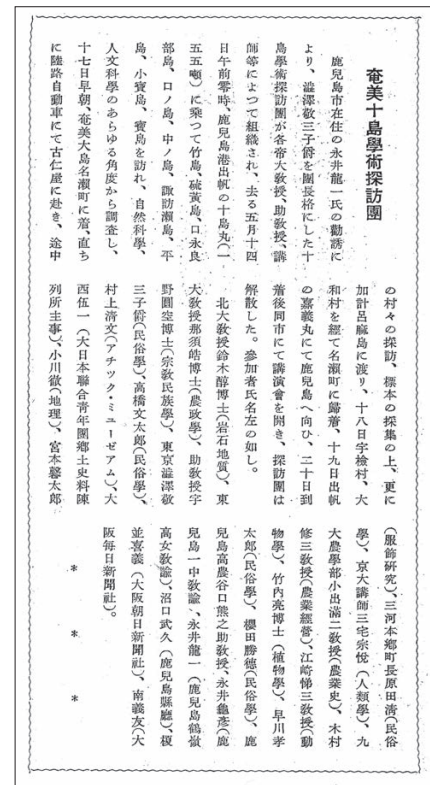


図3 薩南十島調査の参加者（宝島にて）



（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵アチック写真
目録番号河 1-26-2）

ものであるが、ここには上記の他にも十島丸の前村与市船長やボーイ、一行を迎えた現地の人なども写っており、30名を超える一団となっている様子が見られる⁽⁵⁾。しかしながら、この記念写真は、宝島に上陸した際に撮影されたものであることはわかっているものの、撮影者は判明しなかった⁽⁶⁾。

務取締役子爵澁澤敬三氏は、知友である大學教授連を誘ひ合せて十島調査團を組織し、農業、経済、地質、民族、宗教、生物などあらゆる方面にわたつて、久しくとざされた南海の謎の島をノックすることになり」と見出しにあり、記者に対しても洪沢が「知友」の研究者をあつめて調査を実施したと説明していたことが推察される。

調査参加者に関して、アチック写真〔河 1-26-2〕（図3）は洪沢の還暦記念に出版された写真集『柏葉拾遺』をはじめ、さまざまな書籍で薩南十島調査が紹介される時に掲載される

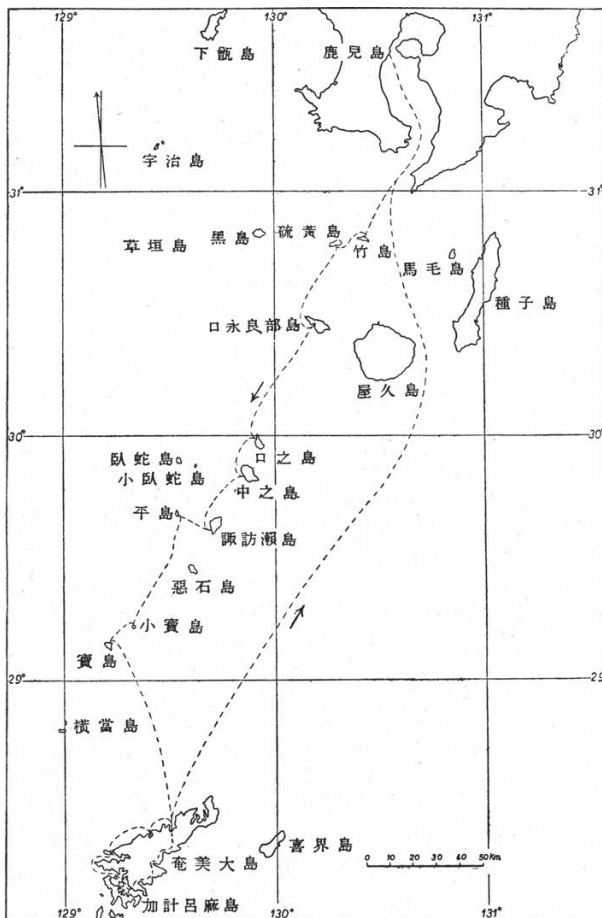
3) 調査の行程

調査の行程を地図で示したものが図4である。これは後に紹介する鈴木醇「吐噶喇火山群島を廻りて」の文中に示されたものである。これまで本共同研究では、アチックフィルム『十嶋鴻爪』の中にアニメーションで紹介される行程図をもとに薩南十島調査の動きを把握してきたが、それ以外の調査参加者によって図示されたものとしては、これが唯一のものである⁽⁷⁾。各島々での寄港位置や奄美大島島内での動き、加計呂麻島から名瀬までの移動など、他の参加者によって説明される行程とも一致する。

このほか、早川孝太郎、村上清文、高橋文太郎、小川徹、原田清、桜田勝徳のアチック同人は、薩南十島調査の出発前日である5月13日（十島への出発は14日午前零時）に桜島へ渡り、西桜島村の武と藤野で調査をおこなっている〔桜田 1982: 341〕。また、帰途は19日午前9時半名瀬港出発の大阪商船嘉義丸で、途中の寄港をせず20日午前6時に鹿児島港へ到着している。

なお竹島・宝島間の到着・出発時刻は江崎悌三「吐噶喇列島の蝶類」に詳しく、以下に

図4 薩南十島調査の行程図
（鈴木醇「吐噶喇火山群島を廻りて」より）



転記しておく。

● 5月14日		● 5月15日		● 5月16日	
午前6時	竹島上陸	午前2時30分	口永良部島発	午前2時	諏訪瀬島発
9時25分	竹島発	6時	口之島上陸	6時	平島上陸
10時30分	硫黄島上陸	9時30分	口之島発	8時15分	平島発
午後3時40分	硫黄島発	11時	中之島上陸	11時30分	小宝島上陸
6時	口永良部島着	午後5時20分	中之島発	午後2時50分	小宝島発
		7時30分	諏訪瀬島着	3時40分	宝島上陸
				10時20分	宝島発

調査団一行はその後、午後1時から鹿児島県立図書館で報告会をおこない、指宿まで足を伸ばした後に福岡まで移動し宿泊している。小出満二や木村修三などの九州から参加した調査団メンバーとどの時点で別れたのかは明らかでないが、アチック同人は21日には下関・宇部、22日には広島まで移動し、同地で磯貝勇と合流し西条・東条・米子・松江経由で隠岐調査へと向かったのである⁽⁸⁾。

4) 島々から寄せられた資料

薩南十島調査では、訪問先の島々で準備された資料（以下、準備資料）が存在することが確認されている。この資料は現在、アチックの祭魚洞文庫を引き継いでいる流通経済大学所蔵祭魚洞文庫、およびアチック同人であった宮本馨太郎の資料を管理している宮本記念財団に保管されている。また、民俗学写真家の須藤功氏が管理されている早川孝太郎の資料の中にも準備資料が存在することがわかっている。祭魚洞文庫に含まれる準備資料は『桜島噴火記』（流通経済大学図書館請求記号291.97-5）で、島々からのもの以外に、薩南十島調査の後に向かった隠岐の「隠岐遊覧案内」という観光地図や、高橋文太郎の「奄美十島及大島に於ける民具」の別刷、谷口熊之助「十島村探訪記」の別刷など、調査後の報告も含まれている。谷口の別刷の表紙には「ミュージアム御中」とあり、この『桜島噴火記』がアチックの資料であることが推察される⁽⁹⁾。宮本記念財団に保管されている準備資料は、『十島雑綴』と題して製本された上下二巻の冊子である。準備資料のほかに、宮本による目次、調査参加者の一覧、当時の新聞掲載記事の切り抜きが綴じられている。早川の所蔵していた準備資料については、本共同研究の成果発表会で須藤氏から配付されたレジュメによれば、袋の表書きには「昭和九年五月十四日一十九日 十島及び奄美大島探訪時 各島より」とあり、各島への上陸時に手にしたものであることがうかがわれる⁽¹⁰⁾。

三者の資料の所在状況をまとめたものが表1である。調査の行程順に時系列に製本された宮本馨太郎の『十島雑綴』の目次を基準に、アチック・早川の所蔵資料の有無を比較したものである。早川の資料にはアチックや宮本の資料には含まれないものもあり、『沖永良部島誌』などは「(頁の最後に記す 昭和十四年十一月六日)」とあるように、当時九州帝大にいた早川が薩南十島調査後に入手したものと考えられる。

この多くの準備資料は調査団一行の来島が事前に通知され、各島で準備（あるいは以前に作成されたもので代用）したものであろう。アチックの来島のために作成されたと明記されているものは2冊あり、『中之島を語る』には「昭和九年五月十五日 澁澤子東京御一行ヲ迎ヘル二当り」、『忘れ勝の小宝島』には「島小なる爲忘れ勝の際今や將に光榮とする澁澤子爵御一行を迎へんとす。」との記載がある。それぞれの内容は、標題からもわかるように島の概要をはじめ、盆踊りや島民の生活に関するものが多く、その端々に十島村民が置かれてきた過酷な生活の窮状を訴える文言が見える。硫黄島のように数冊の資料を用意した島がある一方、口之島のように準備資料が確認できな

表1 準備資料の比較

資料名	祭魚洞文庫 『桜島噴火記』	宮本馨太郎編 『十島雜綴』	早川孝太郎の 薩南十島資料
鹿児島県大島郡十島村村勢要覧 村役場編	○	○(上)	○
十島村條例集 村役場編		○(上)	
竹島を語る 竹島分教場主任 麓幸雄著	○	○(上)	○
硫黄島要覧 硫黄島尋常高等小学校	○	○(上)	○
硫黄島区民ノ生活史 硫黄島尋常高等小学校	○	○(上)	○
硫黄島歌謡集 硫黄島尋常高等小学校		○(上)	○
我が校ノ教育 硫黄島尋常高等小学校校長稲江清二	○	○(上)	○
本校ノ農業教育 硫黄島尋常高等小学校校長稲江清二	○	○(上)	○
中之島を語る 中之島尋常高等小学校著	○	○(下)	○
中ノ島盆踊歌詞 中之島尋常高等小学校編		○(下)	
忘れ勝の小宝島 小宝島分教場主任南繁隆著	○	○(下)	○
宝島現状 宝島尋常高等小学校著	○	○(下)	○
伝書覚 宝島尋常高等小学校編	○	○(下)	
大和村役場沿革誌 大和村々長 松元福次郎著		○(下)	○
川智翁事蹟 大和村村役場著		○(下)	○
開饒神社明細帳 大和村村役場著		○(下)	○
「隠岐遊覧案内」	○		
昭和6年11月 鹿児島県立図書館「桜島噴火記」	○		
昭和9年7月 鹿児島高等農林学校 谷口熊之助「十島村探訪記」 校友会報(土)第八号別刷	○		
高橋文太郎「奄美十島及大島に於ける民具」旅と伝説第7年8月号別刷	○		
鹿児島県大島郡『十島村航路改善ニ關スル意見書』			○
『昭和九年度鹿児島県大島郡十島村歳入歳出豫算』			○
昭和八年『大島郡東方村村勢要覧』			○
奄美大島概史			○
昭和八年六月『奄美大島語概観 奄美大島年中行事』鹿児島県立大島中 中学校			○
昭和八年六月『奄美大島郷土史概説』鹿児島県立大島中学校			○
町制十周年記念編纂『名瀬町案内』附録 鹿児島県立大島郡			○
『沖永良部島誌』(頁の最後に記す 昭和十四年十一月六日)			○
(抜粋)『南島雑話』			○
昭和八年八月調製 鹿児島県鹿児島郡『西櫻島村現勢一覽表』西櫻島村 役場			○
『鹿児島県立市來農藝學校學則 鹿児島県立市來高等公民學校學則』			○

※1 資料名は宮本馨太郎『十島雜綴』目次を基本にし、祭魚洞文庫、早川孝太郎資料それぞれにしかないものはそれらによった。

い島もあり(諏訪之瀬島については事前の連絡なしに訪島しているので準備資料も当然ない)、ここに各島の調査団に対する期待や温度差があらわれているようにも見受けられる⁽¹¹⁾。

5) 調査参加者による報告

ふたたび洪沢の「二十年前の薩南十島巡り」を辿ってみると、各参加者の調査内容や印象、その成果について後半部分で次のように述懐している。

海岸の岩間に清澄な海水がたたえられ底にはエラブウナギがじっと横たわっている辺で江崎さんは海のアメンボー採集に余念なく、三宅さんは村人の指掌紋を克明に採印しておられた。サンゴ礁片で無造作にかこっており、中の棺がすき見出きる地上の墓や社殿のない極めて原始型に見える神域等は宇

野さんや民族学者の注目の的であった。(中略)

染料に用いる紅花を見たり、古い型の着物を頂だいたり（これは保谷村の民族学協会博物館に保存されている）、年中行事や祭葬または家族構成や日常生活の調査に常民文化研究所の連中はなかなか忙しい。那須さんはじめ農学方面の方々は島の農業実態把握に努力され、さらに漁業慣行や技術にも注意が向けられた。いろいろ見ているうちに離島生活文化の渋滞性も強く意識されるが、中には内地その他外部の文化との落差がはげしくなるとかえってある段階にまで来ていたものが逆に古い型へまいもどるものもあることがうかがわれて、頭から島のは全部古くからの仕来りとのみは断じ得ないものもあると大タニワタリの繁る巨木の下で考え込んだこともあった。各種の資料が写真やスケッチとともに集まったが、まとめる時期が既に支那事変に入ったため支障を来し遂に公刊の機を失したのはいまもって残念である。

それでもその一行に『朝日』と『毎日』両紙が一人ずつ記者を特派され、かなり長い記事を当時連載され孤島苦に悩む人々の気持を世に紹介されたのはせめてもの慰めであった。

冒頭では参加者それぞれの調査内容に触れている。この文章はタイトルにもあるように、昭和28年に書かれた回想文であり、『柏葉拾遺』や『犬歩当棒録』に収録された渋沢自身の「旅譜」(図5)のもととなった手帳を見ながら書かれたものであろうか。文中に「古い型の着物を頂だいたり（これは保谷村の民族学協会博物館に保存されている）」とあるのは、民族学協会博物館その後文部省史料館を経て現在は国立民族学博物館に収蔵されている資料「シマヅメカタツケ」(標本番号H0016601)であろう〔神奈川大学国際常民文化研究機構 2014: 142〕。

注目すべきは成果についての言及で、「各種の資料が写真やスケッチとともに集まったが、まとめる時期が既に支那事変に入ったため支障を来し遂に公刊の機を失したのはいまもって残念である。」と述べている点である。スケッチについてはその所在はわかっていないが、ここで渋沢がいう写真はおそらく、本共同研究の中心となっている薩南十島関係のアチック写真のことであろう。また、「各種の資料」とは、前述の流通経済大学に保管されている祭魚洞文庫のうち『桜島噴火記』に含まれる島々からの準備資料と推測される⁽¹²⁾。

アチックから報告書が公刊されなかった点については既に述べたとおりだが、ではアチック同人や参加者はこの調査の成果をどのように発表していったのだろうか。それらをまとめたものが表2である。

薩南十島調査は昭和9年5月に実施されており、ここでは発行年順に確認していきたい。また、それぞれの学術的な成果の確認ではなく共同調査にどう参画したのか(調査に参加した経緯や調査での分担)、あるいは参加者同士での調査成果の共有(ここではアチック写真を含む調査地で得た写真・映像その他の資料について)、調査中の一行の様子描写といった観点にとどめる。

図5 薩南十島調査の「旅譜」
(渋沢敬三『犬歩当棒録』より)

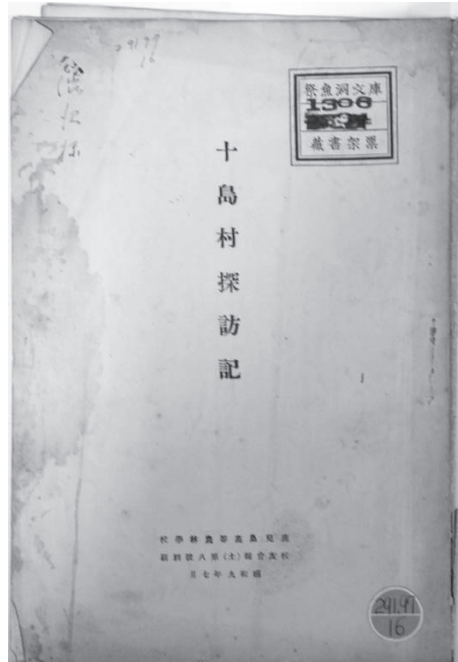
薩南十島〔永井竜一、永井亀彦、那須皓、小出満三、宇野 円空、木村修三、江崎梯三、竹内亮、谷口熊之助、鈴木醇、 三宅宗悦、桜田勝徳、小川徹、早川孝太郎、宮本馨太郎、 村上清文、高橋文太郎、大西伍一、原田清、他に、文園村 長、前村船長等〕⑦ 東京●●鹿児島●●(岩崎谷庄)●●十島丸(一五〇トン) (夜行)●●竹島●●硫黄島(安徳帝、俊寛遺跡)●●口ノ永 良部島(仮泊)●●日之島●●中之島●●諏訪之瀬島●●平 島●●小宝島●●宝島●●名瀬●●任用(ユタの一人を 訪う。古仁屋への途次、自動車の中よりモウセンゴケ群落 発見)●●古仁屋●●加計呂間島(諸鈍)●●古仁屋●● 宇検(浜田国義)●●大和浜●●名瀬●●(嘉義丸三、〇〇〇 トン)●●鹿児島(岩崎谷庄、一行解散)●●指宿●● 鹿児島●●福岡●●下関●●宇部●●下関●●広島	5・12—26
---	---------

表2 薩南十島調査参加者による成果

	発行年月日	執筆者	論考名	掲載誌／巻号／発行者	備考
1	昭和9年7月	谷口熊之助	「十島村探訪記」	『鹿児島高等農林学校校友会報(土)』第八号別刷	昭和9年6月25日記
2	昭和9年7月1日	高橋文太郎	「島の山と村」	『ケルン』第14号 朋文堂	
3	昭和9年7月1日	三宅宗悦	「薩南十島探訪挿話」	『ドルメン』7月号 岡書院	
4	昭和9年8月1日	高橋文太郎	「奄美十島及大島に於る民具—主として運搬具と仕様法—」	『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社	
5	昭和9年8月1日	早川孝太郎	「踊りの着物—薩南十島にて—」	『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社	
6	昭和10年1月1日	木村修三	「舊川邊十島農業一覧記(一)」	『農業と経済』第2巻第1号 農業と経済社	
7	昭和10年2月1日	木村修三	「舊川邊十島農業一覧記(二)」	『農業と経済』第2巻第2号 農業と経済社	
8	昭和10年3月5日	宇野圓空	「余の奄美十島に視たる宗教」	『財團法人明治聖徳記念學會紀要』第43号 財團法人明治聖徳記念學會編	
9	昭和10年6月	鈴木醇	「吐噶喇火山群島を就きて(摘要)」	『地質學雜誌』42巻501号 日本地質学会	
10	昭和10年8月1日	小川徹	「薩南十島 家・畑・水」	『旅』第12巻第8号 日本旅行倶楽部	
11	昭和10年	江崎悌三	「吐噶喇列島の蝶類」	『七高造士館生物研究會々誌』I	
12	昭和11年3月	鈴木醇	「吐噶喇火山群島を廻りて」	『火山』第2巻第4号 日本火山學會	
13	昭和11年8月	竹内亮	「吐噶喇列島植物瞥見」	『福岡博物學雜誌』第2巻第1号 福岡博物學會	
14	昭和11年11月	三宅宗悦	「奄美大島北部住民の手掌理紋の研究」	『人類學雜誌』第51巻第11号 東京人類學會	
15	昭和33年1月20日	早川孝太郎	「吐噶喇列島の民具」	『日本の民具』 角川書店	
16	昭和51年1月10日	早川孝太郎	「薩南十島を語る」	『早川孝太郎全集 第九巻』 未来社	当時未刊
17	昭和57年2月25日	桜田勝徳	「十島巡遊 奄美大島」	『桜田勝徳著作集7 未刊探訪記(II)・回想記』 名著出版	当時未刊

平成26年8月29日現在

図6 谷口熊之助「十島村探訪記」
(流通経済大学図書館所蔵「祭魚洞文庫」より)



(1) 昭和9年7月発行 谷口熊之助「十島村探訪記」
『鹿児島高等農林学校校友会報(土)』第八号別刷
調査終了後、およそ1ヶ月というもっとも早くその成果をまとめて発表されたもので、鹿児島高等農林学校校友会報『土』第8号に掲載された。見開きのタイトルは「紀行 十島村探訪記」となっており「前へ置き／位置、其の他に就て／生活、其の他に就て／生業に就て／栽培に就て／終りに臨みて」と構成されている。全体としては、後に発表される木村修三「舊川邊十島農業一覧記」と同様、十島調査全般にわたっての民俗的な内容も豊富に含んだ調査記録である。宮本馨太郎の『十島雜綴』に挟まれた参加者名簿では谷口の研究対象として「エラブウナギ」と書かれているが、当時の研究対象は茶業であった(エラブウナギ研究は永井亀彦)。なお、本文中にアチック写真の掲載はない。

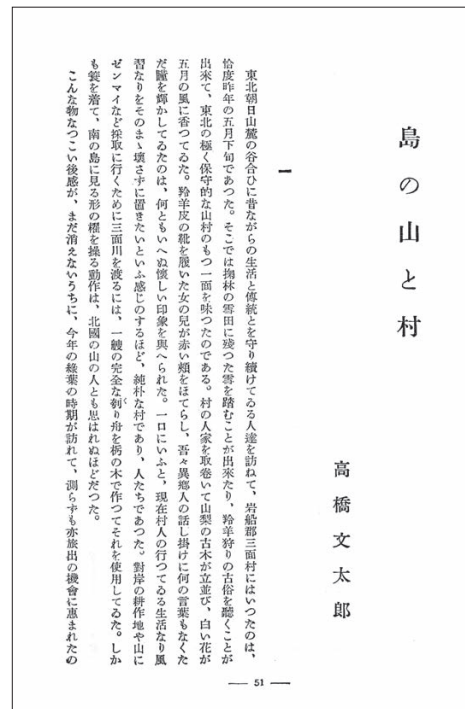
本論考の末尾で「本文は去る五月決行された、澁澤子爵の十島探訪團に参加の榮を得て親しく見聞した所である。今之を稿するに當り忘れ難き當時を顧みて先づ飛入

り参加を許容されし探訪團に篤く感謝し同時に終始御世話になつた團長、團員の方々、面倒を見て下さつた十島丸及び前村船長、船員各位並に視察に就て特に御盡力を辱ふした文園村長殿始め安永議員其他村重役各位學校関係の方々並に各部落一般各位に對し衷心感謝の意を表し、他面此の成果を収めしめた好天氣を唯偶然とせぬものであります。(昭九・六・二五・記)」と記している。早川孝太郎『花祭』(岩崎書店 1957)に渋沢が寄せた序文によれば、「早川さんは昭和八年十一月から九大農学部農業經濟研究室助手として小出満二教授の指導を受けるために福岡に留学された。ここで小出博士のほか木村修三・江崎悌三・谷口熊之助(鹿児島)の諸教授方と交友の道が開かれ、また鹿児島永井龍一・亀彦兄弟とも親交が結ばれた。こんなことが縁となり、昭和九年の薩南十島研究團が実行に移された」とある。調査への参加は「飛入り」としているものの、在九州の研究者との早川の交流の結果が谷口の薩南十島調査への参加につながったことは明らかである。

(2) 昭和9年7月1日発行 高橋文太郎「島の山と村」『ケルン』第14号 朋文堂

明治大学山岳部のOBであり同部の発起人でもある高橋は、著書『山と民俗』『山の人達』『山と人と生活』等で、民俗の調査対象として山に生活する人々に焦点をあてている。この論考が掲載された『ケルン』は山岳雑誌であり、執筆者紹介欄では「武蔵野鐵道の高橋さんといふより民俗學者として知られてをり、その著「山と民俗」出でて俄然山登る仲間から敬倒せられるに至つた」とある。本論考でも越後三面調査の事例を引き合いに導入があり、「一」では十島調査全般の調査結果と私見を述べ「二」では中之島の御嶽や硫黄島の硫黄嶽から「島の生活を營んでゐる人々が、どんな風に島の一番高い山を見かつ考へてゐるかといふことは興味ある」とし、短時間での「旅行者、採集者」との立場では調査に不十分な点があることを認めつつ信仰との関わりを考察している。「三」では十島調査の後に向かった隠岐での調査を報告している。「原始的な農業形態といはれる牧畑經營」、「四カ年一回づつの完全な輪換耕作」によって山が利用されていることを中心に報告をしつつも「民俗を訪ねながら、またいつも山を忘れない自分としては、石楠の花がこの島に咲くことを知つて、久しく求めてゐたものに再會した思ひになれた」と木樵仕事の事務所での聞き書きに情緒的な面を覗かせている。この原稿は、隠岐からの帰京後まもない昭和9年6月1日に執筆されたもので、山岳雑誌への投稿のため、読者層の違いを意識したと感じられる部分もあるが、調査後まもなく書かれたもので十島調査のみならず隠岐での一行の様子を把握することができる貴重な文献といえる。なお、本論考にアチック写真の掲載はない。

図7 高橋文太郎「島の山と村」



(3) 昭和9年7月1日発行 三宅宗悦「薩南十島探訪挿話」『ドルメン』7月号 岡書院

十島調査での三宅の個人的なテーマである手掌紋の研究については後に紹介する『人類学雑誌』まで成果を待たねばならないが、これは調査行程における「挿話」を列挙したもので、内容は余談、裏話といったものが主である。見出しでは「硫黄蒸し／蚤の採集／永良部鰻／捨木／記念撮影／寫眞屋さん／神殿／行倒れ／タブー／肩書き身替り／餘りにも小さい」という内容であるが、島々を訪れつつアチックの民具収集がおこなわれ狭い船室に詰め込んでいたこと（蚤の採集）、「一行二十三名に寫眞機が二十五位」、「十六ミリ映寫機が二臺、パターベビーが一臺」持ち込まれたことなど（寫眞屋さん）、調査団の様子を細かく描写した部分も多い。また、同誌には執筆者不明ながら「奄美十島學術探訪團」と題した十島調査の行程、参加者名が掲載された記事もあり（図2）、十島調査の概要把握には貴重な文献である。なお、アチック写真の掲載はない。

図8 三宅宗悦「薩南十島探訪挿話」



(4) 昭和9年8月1日発行 高橋文太郎「奄美十島及大島に於る民具 —主として運搬具と仕様法—」

『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社

高橋の論考は「島の山と村」に続くもので、副題にあるように、十島調査に際して得られた見聞のうち「運搬具と仕様法」についてまとめられたものである。冒頭では、各島々での歓待によって日常生活がほとんど窺えなかったことへの無念さ、各島小学校に集められた現在は使用しない古い品々については「吾々を益する處が大きかつた」とその感想が述べられている。「運搬具」を選んだ理由としては「これらの島々に於る農家或は農兼漁業の家々で現在使用しゐる日常用具」であることに重きを置いたからと説明している。竹島、硫黄島、口永良部島、口之島、中之島、諏訪之瀬島、平島、小宝島、宝島、奄美大島と調査行程順に、14枚の挿図を中心に聞き書きをもとにした使用方法を解説している。表3の通り、いずれの挿図もアチック写真の中に含まれており、特にこれらについては高橋によるものと見られるメモ書きが写真の上に付されている（図10参照）。調査での撮影時から、運搬具にテーマを絞っての成果の発表を考えていたのであろう。

図9 高橋文太郎「奄美十島及大島に於る民具 —主として運搬具と仕様法—」



表3 高橋文太郎「奄美十島及大島に於る民具 一主として運搬具と仕様法一」に掲載の写真図版

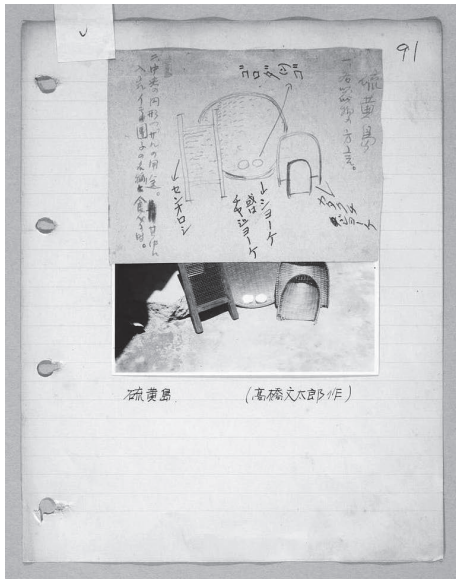
図版番号	図版のキャプション	アチック写真目録番号	アチック写真が貼られた台紙の記載文	台紙に貼付けられた紙の記載文
第1図	ノリテゴを負ふ女（竹島）	ア-9-41	40 竹島（高橋文太郎作）	竹島 一、この女の人の着て居る上着の名称。不明、二、ゴシにつけた籠の名称。ノリテ（ン）ゴ〔海苔、ミナ（貝類）などの採取に〕
第2図	テゴを負ふ女（竹島）	ア-9-40	39 竹島（高橋文太郎作）	竹島 一シヨイ籠の名 テゴ。材、大名竹、
第3図	木車（竹島）	ア-9-42	41 竹島（高橋文太郎作）	竹島 一、この車の方言。キグルマ 主として薪等の運搬。
第4図	釜屋の内部（竹島）	ア-9-24	23 竹島 カマヤ（又はナカキ）（高橋文太郎作）	
第5図	ヨコザの部屋（竹島）	ア-9-26	25 竹島（高橋文太郎作）	
第6図	採採用のカルイ（硫黄島）	ア-9-93	92 硫黄島 カルイ（高橋文太郎作）	
第7図	甘藷團子と織維下し（硫黄島）	ア-9-92	91 硫黄島（高橋文太郎作）	硫黄島 一、各器物の方言。←ゴロダ（ン）ゴ →カタクチ 〈□〉 ジョーケ →シヨーク或いはチャジョーケ →センオロシ 二、中央の円形のザルの用途。〈其中〉其中に入ったイモ〈の〉団子の名称と食べる〈と食べる〉時。
第8図	釜屋の内部（硫黄島）	ア-9-91	90 硫黄島 カマヤの内部（右）甘藷をふかす釜（高橋文太郎作） カマド 1.7 × 1.4 寸← 1.7 × 1.3 寸←	
第9図	主屋・ヨコザの部屋（硫黄島）	ア-9-73	72 硫黄島（高橋文太郎作） (1) 台所	
第10図	カルイとテゴ類（中之島）	ア-10-105	206 中之島（高橋文太郎作）	中ノ島 一、各器物の方言。カルイ、ナタバコ、テゴ 主として甘藷らしい。二、用途、何を運ぶか簡単に御知らせ下さいませれば幸いです。不明 〈□□〉
第11図	赤子を負ふ女（中之島）	ア-10-96	197 中之島（高橋文太郎作）	
第12図	物を運ぶ糸満人（小宝島）	ア-11-82	287 小宝島（高橋文太郎作）	小宝島 一、頭に載せた袋は何ですか。石□ 二、頭に物を載せて運ぶことを方言にて何と呼んで居りますか。カサ（？） 三、背に背負って居る籠の名。テゴ 人物は糸満人。
第13図	テゴを載せた女（寶島）	ア-12-42	333 宝島（高橋文太郎作）	宝島 1. 籠の方言。テゴ 二、籠を載せるために頭に置いたワの方言。カフシ（心は藁、周りはコバ）
第14図	初摺白と挿棒（大島大和村恩勝）	ア-13-27	400 大島大和村恩勝 初摺り白（高橋文太郎作）	

(5) 昭和9年8月1日発行 早川孝太郎「踊りの着物 一薩南十島にて一」

『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社

早川の本論考は、前出の高橋の論考に続くかたちで『旅と伝説』第7年8月号に掲載されている。薩南十島においていくつかの島で調査団が見ることとなった踊りについて、着物を中心に短い文章をまとめている。調査全体の動きについては「中でも日が全く暮れてから、松明の明りを便りに上陸した諏訪ノ瀬島の八月踊りは、感鳴が殊に深かった。突然の訪問で、最初に上陸した者が、出て来た島人に事情を話して諒解を得た位だから、他の島々のやうに準備も何も無い。」と、諏訪ノ瀬島への訪問の様子を明らかにしている。寄航に至った経緯は誰も明らかにしていないものの、午後

図10 写真の説明が書かれた紙が貼られている高橋文太郎の写真



(神奈川大学日本常民文化研究所蔵アチック写真 目録番号ア-9-92)

図11 早川孝太郎「踊りの着物 一薩南十島にて一」



7時半に上陸したいという行程を裏付ける証言である。また「豫め頼んで置いた事ではあつたが、どの島でも、日常の生活器具から、以前の生活を思はせる品々をも蒐めて見せて下さつた。」とあり、事前の通知によって学校にこうした品々が集められていたことが述べられている。資料の収集に関しては「中ノ島では、遂に辛棒が出来なくなつて、濟まぬとは思つたが村長の文園さんに頼んで、一枚を譲つて貰つた。」という。これが先に紹介した国立民族学博物館に保管されている資料かどうかは確認できていないが、早川は硫黄島でも資料の入手を次のように試みている。「硫黄島小學校に於ける青年の太鼓踊りと、娘達の手踊りが済んでから、自分は一行と別れて、一通り島の家々を廻つて見た。」後に、一軒の家先でみかけた着物を譲つて貰おうと持ち主の老婆と交渉するが「返事の前にまづ首を横に振つて見せた。—うらぬ、何ぼうでもうらぬ—と、その態度は自信に満ちた、そうした動かし難いものであ」つたと、失敗に終わったことを明らかにしている。

論考冒頭に挿入された1枚の図版には「口ノ島の娘踊り」とキャプションがあり、撮影者は明示されていないが、これはアチック写真に含まれる江崎悌三によって撮影されたものである〔アチック写真目録番号：ア-10-27〕。

(6) 昭和10年1月1日発行 木村修三「舊川邊十島農業一覽記(一)」

『農業と経済』第2巻第1号 農業と経済社

(7) 昭和10年2月1日発行 木村修三「舊川邊十島農業一覽記(二)」

『農業と経済』第2巻第2号 農業と経済社

当時九州帝大教授であった木村は、自身の専門である農業経済に引きつけ、「はしがき／自然／社会／土地(以上「一」)、経済殊に農業／むすび」と論考を展開している。自身の調査に於ける見聞と統計数値、さらに挿図合計14点を用いており、このうち写真については表4にまとめたように13点が掲載されている。第5図のキャプションに「中之島大平より清岳を望む、第四圖を撮し

たと略ぼ同じ位置から約九十度左方を撮したのである。」とあることから、自身で撮影したことをうかがわせるが、残念ながら木村の写真はアチックに提供されなかったようでアチック写真には含まれていない。

統計数値や表については「此處で數字を擧げ、或は移出、有無を記したのは頒れた刷物、自ら見聞した所によつて記した」と述べている [木村 1935: 136]。「頒れた刷物」とは先に述べた、現地を訪問した際に配布された準備資料のことと思われる。このうち本論考では『十島村勢要覽』が多用され、一部に『竹島を語る』が引用されている。要覽は昭和9年に調べられたもの（統計数値は前年）で、自身の調査結果とあわせ、当時最新の十島の様相を客観的な数値で把握しようとしている。また、桜田も引用しているが、「社会」のうち「交通」の項目では十島丸就航とあわせて語られる、永井龍一が見た黒島の退役軍人の話が紹介されている。

図12 木村修三「舊川邊十島農業一覽記（一）」

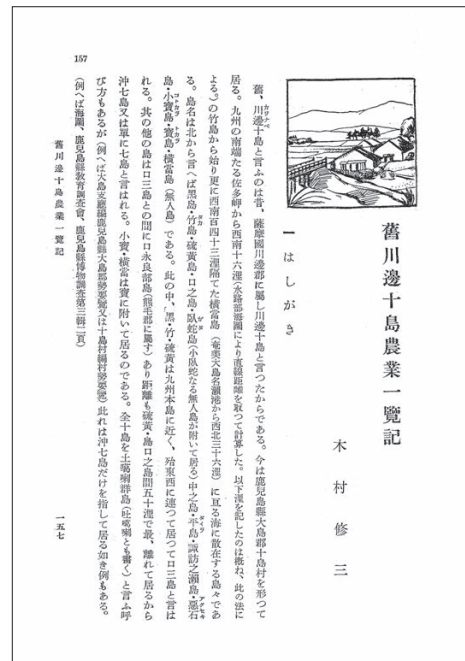


表4 木村修三「舊川邊十島農業一覽記（一）・（二）」に掲載の写真図版

図版番号	図版のキャプション	アチック写真目録番号	アチック写真の台紙記載
第2図	小寶島 山は火山岩であり海に近い、緩傾斜の處が隆起珊瑚礁である。屋根の三つ四つ見えるところが村である。村、耕地の一半、蒲葵の林は隆起珊瑚礁の上に在る。	該当なし	
第3図	中之島のシチトウキとフトキの自生地、圖中の人物は谷口鹿兒島高農教授	該当なし	
第4図	中之島大平	該当なし	
第5図	中之島大平より清岳を望む、第四圖を撮したと略ぼ同じ位置から約九十度左方を撮したのである。	該当なし	
第6図	口之島に於ける田芋	該当なし	
第7図	寶島隆起珊瑚礁上に繋ぎ飼ひした馬	該当なし	
第8図	竹島の鋤と車、車の輪も木製で主に薪を運ぶ	該当なし	
第9図	小寶島の鋤 場所は臺所の横である	該当なし	
第10図	平島、鋤と犁、後ろは庭と路との境の石垣である	該当なし	
第11図	寶島の犁、甘蔗搾殻の上に置いてある	該当なし	
第12図	寶島の農家	該当なし	
第13図	平島の高倉	該当なし	
第14図	竹島分教場の上の尾根にある小麥畑、對照の胴亂は中等僧校生徒用の小形のものである	該当なし	

(8) 昭和10年3月5日 宇野圓空「余の奄美十島に視たる宗教」『財團法人明治聖徳記念學會紀要』第43卷 財團法人明治聖徳記念學會編

宇野の論考は、冒頭に「予の講題は奄美十島に關してあるが、實は素通り式の見聞を述べる迄であつて、研究の性質を帯びたものでない。」としている。調査団や行程についての言及はないものの、他の多くの参加者同様に、滞在時間の短さによって十分な調査ができない中で、最低限の情報の提

図13 宇野圓空「余の奄美十島に視たる宗教」

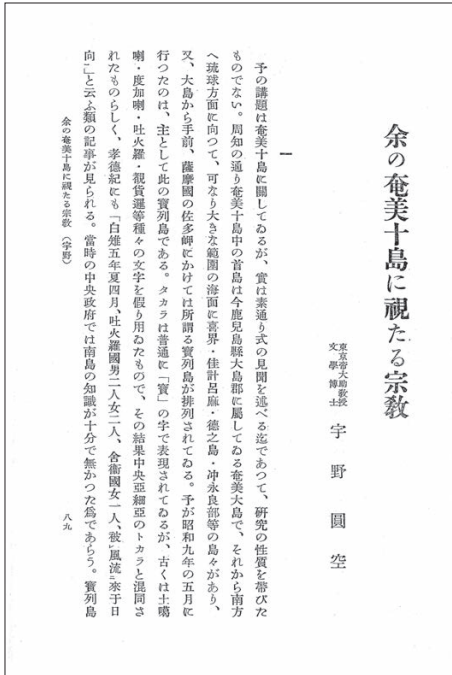
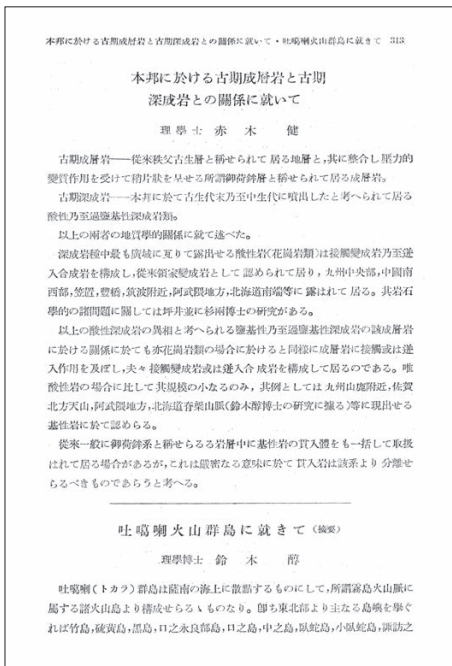


図14 鈴木醇「吐噶喇火山群島を就きて (摘要)」



供が「素通り式の見聞」の発表ということであろう。また十島が「どうして中央方面の人々に興味を感じさせたのかと云ふと、古來交通不便で寄航者が少く、随つて其處には古いものが残つてゐるであらうと想像される事、及びその特殊な風習が幾分誇張されて傳はつてゐる事などが原因のやうである。」と推測しており、「古いもの」を確認するとともに「誇張され」た「特殊な風習」の事実確認が、宇野の調査参加にあつての目的であろう。なお、宇野の論考にはアチック写真の掲載はない。

(9) 昭和10年6月発行 鈴木醇「吐噶喇火山群島を就きて (摘要)」

『地質學雜誌』42卷501号 日本地質学会

洪沢とは二高時代の同級生であつた鈴木醇であるが、十島調査時は北大の理学部地質学鉱物学第一講座の教授として赴任していた[鈴木醇先生記念出版会 1973: 317]。内容としてはタイトルに摘要とある通り、十島の火山についての所見を短くまとめたものである。「從來本地域は交通極めて不便なりしたため全般的に未だその性質の明かならざる火山多きを遺憾とす。余は機會を得て昭和9年5月、本火山群島中竹島より寶島に到る間9個の火山島を巡歴し、短時間乍ら各島を視察し且つ各島嶼の岩石を採集するを得たり。」と調査にあつての目的意識に加え、調査での様子や成果概要も明らかにしている。なお後に紹介するが、鈴木は「吐噶喇火山群島を廻りて」と題して昭和11年3月に日本火山学会『火山』に詳細な報告を発表している。なお、本論考にアチック写真の掲載はない。

(10) 昭和10年8月1日発行 小川徹「薩南十島家・畑・水」

『旅』第12卷第8号 日本旅行俱樂部

アチック同人であつた小川徹だが、十島調査時は東大地理学科の学生であつた。調査においては主に高橋文太郎の助手としてアチックの民具収集を手伝っていたが、本論考では「家・畑・水」と副題を付し、「十島の島々を巡つた際のノートから抜き害した貧しい回想記」として翌年に発表している。日本旅行俱樂部発行の雑誌である『旅』だが、この号の編集後記を見ると、「暑熱を越えての旅には、海波漂渺の彼方に横たはる島巡りの旅が先づ思ひ出される。というので、彼の地この地の島巡り

を小川、山口、能、大久保の諸氏に御執筆願った」とあり、依頼原稿であることがわかる。高橋の「島の山と村」が山岳関係者に向けた民俗研究の発表であるのに対して、小川の本論考は調査の報告と言うよりも一般読者にむけたテーマを絞った紀行文であるといえる。

早川孝太郎が後に紹介する「薩南十島を探る」のなかで、「今かりにつけたもの」という「薩南十島（さつなんじつとう）」という呼び名が小川の論考でも題名となっているように、昭和10年頃すでにこの調査がアチック内でそう呼ばれていたことがわかる。

(11) 昭和10年 江崎悌三「吐噶喇列島の蝶類」

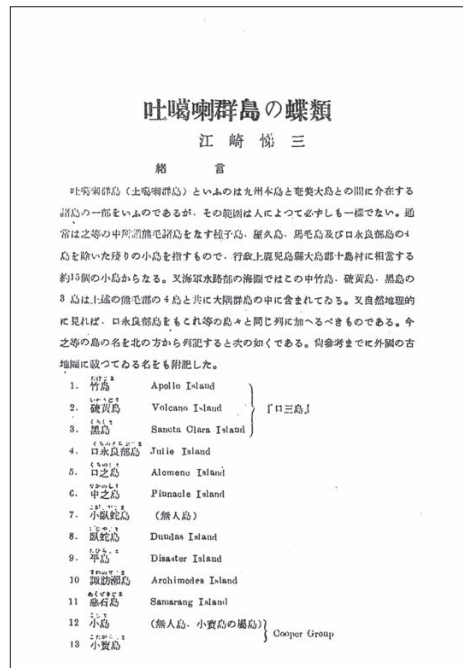
『七高造士館生物研究會々誌』I

江崎の論考はその冒頭に「(トカラ列島の島々の説明に続き/筆者注) 従来これ等の吐噶喇群島の昆虫を調査したものは極めて少い。筆者の知る範囲に於ては、鹿児島高等農林学校の岡島銀次教授が明治43年(1910)7-8月に軍艦葛城に便乗してこれ等の群島を調査せられ、中之島及び寶島の2島にて昆虫を採集されたのと、永井龜彦氏が大正十三年(1924)以来十數回に亘つて同群島の博物調査を行はれた際若干の観察及び採集を行はれたのみである。而して之等の材料の中、蝶類の記録されたものは僅かに1種あるのみで、従来鹿児島縣下の蝶類を論じた諸論文にも本群島の蝶に觸れたものはない。」とし「筆者は昭和9年5月、澁澤子爵の十島探訪團に参加して、極めて短時間ではあつたが、この渡航の困難なる島々の一部に於て観察及び採集を行ふことが出来た。よつてここにその蝶類に関する事実を述べ、更に上述の岡島、永井両氏の御採集品をも併せて同群島蝶相の一斑を考察して見たい。」と執筆の目的を述べている。生物学的な内容の如何については筆者の言及するところではないが、アチックの薩南十島調査を明らかにするものとしては、先述のとおり「1 筆者の行程及び観察」の項に、鹿児島港の出發から奄美大島名瀬に入港するまでの各島の上陸と出發時間が記録されている。それに続き「上に記した如く我々の足跡を止めたのは、竹島・硫黄島・口永良部島・口之島・中之島・諏訪瀬島・平島・小寶島及び寶島の9島に及ぶが、この中で口永良部島と諏訪瀬島の兩島にては既に夕刻となり、蝶類の観察は全く出来ず、又竹島及び平島の兩島にては早朝であつた爲に、十分の観察が出来なかつたのは遺憾である。」

図15 小川徹「薩南十島 家・畑・水」



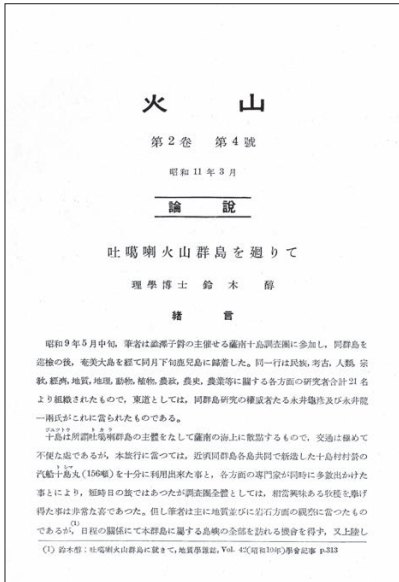
図16 江崎悌三「吐噶喇列島の蝶類」



調査団に関する記述としては「1 筆者の行程及び観察」の中で「7. 寶島」の項に「尚同行の永井龜彦氏はその後数日間同島に滞留して、調査を続けられ」昆虫の採集を続けたとある。確認が必要となるが、これは永井龜彦氏が途中で調査団から離脱し宝島に滞在したことを示すものであろうか。また、本論考においてはアチック写真を含む図版の掲載はない。

(12) 昭和 11 年 3 月 鈴木醇「吐噶喇火山群島を廻りて」『火山』第 2 巻第 4 号 日本火山學會
鈴木は前掲の通り、昭和 10 年 6 月に『地質學雜誌』に「吐噶喇火山群島を就きて (摘要)」として、薩南十島調査での所見をまとめ調査の様子や成果を明らかにしているが、本論考では緒言において、あらためて経緯の説明がなされている。調査と自身の分担については「各方面の専門家が同時に多数出かけた事とにより、短期日であつたが調査團全體としては、相當興味ある収穫を挙げ得た事は非常な喜であつた。但し筆者は主に地質並びに岩石方面の視察に當つたものであるが、日程

図17 鈴木醇「吐噶喇火山群島を廻りて」



の関係にて本群島に属する島嶼の全部を訪れる機会を得ず、又上陸した島でも時間の都合により僅にその一端しか観察出来なかつた爲めに、地質の調査又は岩石の採集が局部的に限られて居た事の多かつたのは甚だ遺憾であつた。」と延べ、学際的な調査の意義を認めつつも、各島での滞在時間の短さや航路の関係で訪れることが出来なかつた島々があつたことに対して無念さをにじませている。いっぽうで、「唯今回巡歴した島々の内には従來地質學關係の者が一歩も足跡を印した事の無い島も少くない様であるから、此の旅行で一瞥した印象を記して置く事は、此の後此の地の旅行者に對し何等かの参考になる事と信じ、茲に筆を執る事とした。」とあり、後に紹介するが、「各島僅かに三四時間位の滞在で詳細の調査が出来ものでない (中略) 要するに世間が大きな期待を持ち過ぎるとすれば、それは私共の大きな迷惑である、此の次に再びお出でになる人達の足がかり

表5 鈴木醇「吐噶喇火山群島を廻りて」に掲載の写真図版

図版番号	図版のキャプション	アチック写真 目録番号	アチック写真の台紙記載
第2図	竹島より見たる乗船十島丸 (昭和9年5月筆者撮影)	該当なし	
第3図	竹島海岸と珊瑚礁 (昭和9年5月筆者撮影)	該当なし	
第5図	東方海上より見たる硫黄岳 (昭和9年5月筆者撮影)	該当なし	
第6図	城ノ原より見たる硫黄岳 (左) 及び稻村岳 (右) (昭和9年5月筆者撮影)	該当なし	
第10図	口之島附近海上より見たる中之島全景 (右御岳) (昭和9年5月筆者撮影)	該当なし	
第11図	口之島前岳 (昭和9年5月江崎悌三氏撮影)	ア-10-7	口之島 メイ岳を望む (江崎悌三作)
第14図	諏訪瀬島全景 (昭和9年5月江崎悌三氏撮影)	ア-11-2	諏訪之瀬島 北方よりの遠望 (江崎悌三作)
第19図	寶島風景、前景は隆起珊瑚礁 (昭和9年5月江崎悌三氏撮影)	ア-12-7	宝島. 海岸の隆起珊瑚礁 (江崎悌三作)
第21図	小寶島風景、前方下部は隆起珊瑚礁 (昭和9年5月江崎悌三氏撮影)	ア-11-31	小宝島. 隆起珊瑚礁と左方のピローの群落 (江崎悌三作)
第22図	小寶島より小島を眺む、右下の岩は隆起珊瑚礁 (昭和9年5月江崎悌三氏撮影)	ア-11-54	小宝島. ピロー群落 遠景は小島. (江崎悌三作)

を作れば良いのだ」と渋沢が鹿児島朝日新聞に語った調査の趣旨に理解を示している。

さて、鈴木論考の中でいくつかの写真が図版として使用されている。それぞれ、写真のキャプションと撮影者、アチック写真に含まれるかどうかを確認すると表5のようになる（この調査で撮影されたものではない写真については省略した）。ここからは、鈴木自身が撮影した写真に加えて、江崎悌三から提供を受けた写真が図版に使用されていることがわかるが、残念ながらアチック写真の中には鈴木が撮影した写真は1枚も含まれていない⁽¹³⁾。

(13) 昭和11年8月 竹内亮「吐噶喇列島植物瞥見」

『福岡博物学雑誌』第2巻第1号 福岡博物学会

九州帝大の植物学教室に籍をおいていた竹内による本論考は調査から2年後に出された。緒言で「本群島は従来交通極めて不便なりしがため、一部の學者によつて比較的早くより注意せられたにかゝらず、二三の島を除いてはその踏査未だ十分ならず、問題は今後に残されて居る現状にある」とし、他の参加者同様にそれまでの学術的な調査の遅れを指摘している。

また、「筆者は昭和9年(1934)5月澁澤子爵の主催せる薩南十島調査團に参加し、十島丸に便乗して、竹島、硫黄島、口之永良部島、口ノ島、中ノ島、諏訪之瀬島、平島、小寶島、寶島の各島を巡見し、奄美大島に至つたが、ここでは吐噶群島に属する諸島の植物観察の大要を報告する」とし、訪問順に各島での観察結果をまとめている。文末には自身が各島で採集または写真をもとに植物目録を掲載しており、写真撮影の目的の一つが目録作成に供する資料の作成であることがわかる。また、結びでは区系地理学的見地から植物の種類について「概して琉球島弧の一傍系群と見るべく」とし、群落生態学的見地からは「本群島の島々はいづれも火山活動と植物生育的の變遷の好観察場面を提供して居る」と所見を述べている。図版には計4枚の写真が掲載されており、表6の通り3枚はアチック写真との照合ができる。

図18 竹内亮「吐噶喇列島植物瞥見」

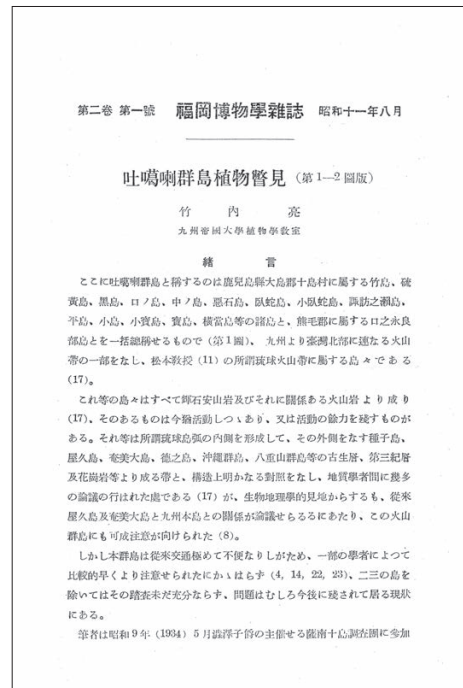


表6 竹内亮「吐噶喇列島植物瞥見」に掲載の写真図版

図版番号	図版のキャプション	アチック写真 目録番号	アチック写真の台紙記載
Tab. 1 1	竹島のカンザンチク林	ア-9-8	7 竹島 (竹内亮作)
Tab. 1 2	中ノ島のガジユマルとオホタニワタリ	ア-10-58	159 中之島 (竹内亮作)
Tab. 2 1	中ノ島の湿原と御嶽	該当なし	
Tab. 2 2	小寶島のアダンとピロウ	ア-11-46	251 小宝島 (竹内亮作)

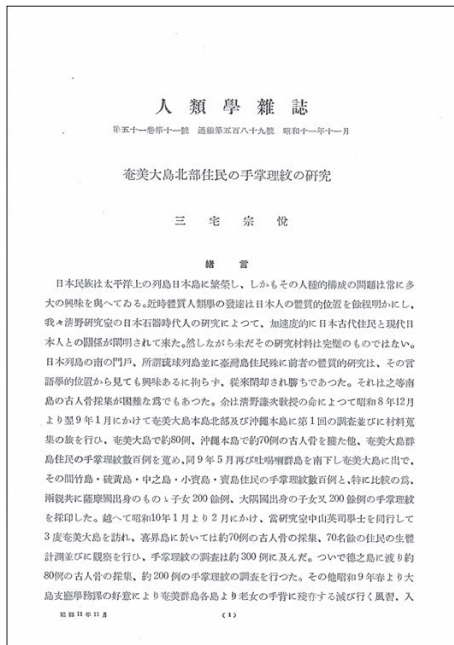
(14) 昭和 11 年 11 月 三宅宗悦「奄美大島北部住民の手掌理紋の研究」

『人類学雑誌』第 51 卷第 11 号 東京人類学会

三宅が薩南十島調査に参加した経緯は明らかではないが、当時京都帝国大学医学部の病理学教室に籍を置いていた。本論考にも繋がる三宅の十島での調査目的は手掌紋の採集であった。すなわち、「従来 2, 3 の體質的類似を持つて、アイヌの子孫の如く云はれ」ていた原日本人論における「奄美大島人は、手掌理紋に於いてはアイヌに對するよりも、相隣りする琉球・琉球糸満・喜界島・大隅・薩摩の諸地方人と各項に於いて互に類似の数値を示し、此等西南日本住民が同一體質を持つ事を明らかにした」のである。三宅はたびたび奄美大島や喜界島、徳之島などを訪れ手掌紋の採集をおこなっており、十島を調査することによって鹿児島と奄美をむすぶ資料を収集しようとしていたのである。

もっとも本論考の発表を待たずして、現地で設定された講演の中でアイヌとの関係を否定している。三宅は人

図19 三宅宗悦「奄美大島北部住民の手掌理紋の研究」



類学の師匠にあたる京大清野謙次の学説を支持する立場から自身の調査研究に臨んでおり、この講演は現地の人々から大変喜ばれ、その様子は後に紹介する薩南十島調査についての新聞記事にも見ることができる。なお、本論考においてはアチック写真を含む図版の掲載はない。

以上が薩南十島調査終了後から 2 年あまりのうちに発表された参加者の成果である。各島での滞在時間の短さによる不十分な調査であったことを遺憾としつつも、そもそも科学的調査がほとんど行われてこなかったところであり、短い所見であってもそれを公表することに調査実施の意義を認めるものが多い。また、以下はアチック同人であった早川孝太郎と桜田勝徳による調査の報告であるが、後にまとめられたものや当時は発表されずその後著作集等の出版でその存在が明らかになったものである。

(15) 昭和 33 年 1 月 20 日 早川孝太郎「吐噶喇列島の民具」『日本の民具』 角川書店

本稿は渋沢の還暦を記念して日本常民文化研究所編として出版された『日本の民具』に収録されたものである。16 点の民具について、採集地や用法・由来等について早川によるイラストとともに紹介している。紹介されている内容は、昭和 9 年のアチックによる薩南十島調査以外にも早川が単独で訪問した昭和 9 年 10 月に黒島、昭和 10 年 6 月に悪石島での単独調査の成果を含んでいる。本共同研究との関連で見ると、アチックフィルム『十嶋鴻爪』に写された「口之島民具 二 三」[通し番号：10-03-00~10-04-00] にみられるシハンテフキや「イサと糸満女」[通し番号：21-00-00~21-03-00] にみられるイサが紹介されている⁽¹⁴⁾。ただし、『十嶋鴻爪』ではそれぞれ口之島、小宝島で撮影しているが、早川の記述ではそれぞれ中之島、宝島となっている。その他の民具も含めていずれも短い説明ではあるが、前出の高橋文太郎「奄美十島及大島に於る民具 一主として運搬具と仕様法一」とともに、薩南十島調査におけるアチックによる民具収集の一端をうかがうことができる文献である。

(16) 昭和 51 年 1 月 10 日 早川孝太郎「薩南十島を探る」『早川孝太郎全集 第九巻』 未來社
 アチックの薩南十島調査が行われた昭和 9 年、早川は九州帝国大学の小出満二のもとへ身を寄せていた。『花祭』出版後、その社会経済史的裏付のなかったことに物足らなさを感じた渋沢の手配による九州行きであったが〔渋沢 1966:2〕、薩南十島調査に際しては早川が「敬三を團長とする十島調査隊のうけ入れ等の世話役をなし」と桜田勝徳は回想している〔渋沢敬三伝記編纂刊行会 1979:874〕。本論考は調査当時は発表されず、『早川孝太郎全集』編者註によれば紀行文のノートの形で残っていたものである〔早川 1976:195〕。早川の紀行文ながら、冒頭には薩南十島調査についての小出満二の文章があり、その中で「本章は「十島小記」と題し多くは早川君の執筆に基づいておるが、桜田勝徳氏の手になるものもあり、写真は同行の木村、江崎、両教授、竹内亮氏が撮られたものも借用した。」とあることは注目される。節の見出しとしては「(1) 薩南十島／(2) 竹ノ島の朝／(3) 硫黄島と俊寛僧都／(4) 平家の落人伝説／(5) 十島と海／(6) 感激の一夜／(7) 七島正月／(8) 正月下駄と盆草履／忘れがちの小宝島／(10) 過去と将来」と構成され、このうち(5)は桜田勝徳によるものである。

小出の文中に「去五月中旬」「本章」とあることから〔小出 1976 195〕、調査から戻ってまもなく書かれた文章であること、いくつかの章立てをもって報告が構成されようとしていたことがうかがわれる。早川が中心となり、小出や桜田も執筆し、木村、江崎、竹内の各氏が調査写真を提供するなど、九州帝大メンバーによって何らかのまとめがなされようとしていたのは小林氏の指摘するところである〔小林 2013 139・143〕。渋沢は「各種の資料が写真やスケッチとともに集まったが、まとめる時期が既に支那事変に入ったため支障を来し遂に公刊の機を失したのはいまもって残念である。」と述べており、桜田も「敬三は参加者の見聞記や写真を一冊にまとめて、記念にしようと希望していたが、遂にその実現は見なかった」とこれを補完している〔桜田 1979 878〕。アチックからの薩南十島調査報告の刊行されなかった背景にはこうした九州帝大での動きを視野に入れていたからではないだろうか。

(17) 昭和 57 年 2 月 25 日 桜田勝徳「十島巡遊 奄美大島」

『桜田勝徳著作集 7 未刊採訪記〔Ⅱ〕・回想記』 名著出版

早川孝太郎の「薩南十島を探る」と同様に、こちらも当時発表されたものではない。内容としては豊富なスケッチを含む調査ノートが中心で、項目としては桜田の関心による舟や漁の聞き書きをはじめ、アチックで収集した民具の名称や年中行事・信仰、家の間取りなど幅広い。時系列に並べられたノートの各島の冒頭には、上陸時間や島の概要が記されているなど、調査の行程を把握する上では貴重な記録である。また薩南十島調査のみならず、それに先立ち 5 月 13 日にアチック同人だけで訪問した西桜島村での調査についても同様に記載されている点は、他の同人の報告には見られない内容である。

6) メディアからみる薩南十島調査

アチックの薩南十島調査は新聞記者が複数同行しているように、当時の報道メディアからも注目されるものであった。もっとも記者の目による記者の文章であり、調査の目的や意図、実態が正しく報じられているとは限らない。しかし、薩南十島調査は報告書の出していない調査であり、事実の一端を示すものとしてここでは各メディアを通してどのように世間に報じられたのかについて見ていきたい。

表 7 十島探訪隊 関係新聞記事切抜帳

新聞名	日付	サブタイトル	タイトル	記者名ほか	備考
1 鹿兒島朝日新聞	5月14日		現代科学の力により 南島の秘庫は開く 学界各方面の諸權威十數氏が昨夜半出帆南島に向ふ		
2 大島朝日新聞	9月19日		澁澤子一行來古 諸鈍踏査の後 宇檢大和經由名瀬へ		
3 大島朝日新聞	5月19日		十島村踏査 研究團一行 昨日再び來瀬		
4 大阪毎日新聞西部版	5月15日	十島調査研究團	共産制實施の火山岩 “竹島” に上陸 島の娘ら晴衣を装ひ歓迎	十島丸にて 南特派員發電①	
5 (大阪毎日新聞西部版)	(5月15日)	十島丸鹿兒島無線 (第二信)	藪鷺の鳴く島へ 文献にあつて實物のなかつた 幾多の珍品発見		新聞名、日付は 推定
6 大阪毎日新聞西部版	5月17日	十島調査研究團	急病人は船で 二日掛りで運ぶ 醫者が一人もゐない		
7 大阪毎日新聞西部版	5月18日	十島調査研究團	食料の缺乏から自然的の出産制限 原始農業を營む小寶島所見	十島丸にて 南特派員發電	
8 大阪毎日新聞	5月17日		方言の歌も面白く 古朴な島の踊り 不気味に唸る噴火山 十島學術調査團寶島へ		
9 大阪毎日新聞	5月18日		學界への土産が澤山 珍・海の昆虫等々 十島調査團歸途へ		
10 大島新聞	5月19日		澁澤子一行に隨行して	柏田記者	
11 大島新聞	5月19日		澁澤子一行 二日に亘り視察研究して 昨日午後三時に歸瀬		
12 大島新聞	5月19日		澁澤子一行の 大歓迎會 於舊校講堂		
13 大島新聞	5月19日		餘興に民謡と 有屋八月踊		
14 大島新聞	5月19日		澁澤子一行 本日出發		
15 (紙名不明)	(日付不明)		(記事名不明)		
16 (紙名不明)	(日付不明)		一般町民に對しての 宇野、那須、小出三氏の 講演要旨 奄美高女講堂にて		
17 (紙名不明)	(日付不明)		澁澤氏一行の 歡迎會盛大を極む		
18 大阪毎日新聞	5月19日		更に出雲と隠岐を調査 學術調査團		
19 大阪毎日新聞	5月19日		八重山列島へも科學の觸手		
20 大阪毎日新聞西部版	5月19日		十島調査團 廿日 來覽 引續隠岐と出雲調査		
21 大阪毎日新聞西部版	5月20日		期待される けふの調査發表 公會堂で大講演會		
22 大阪毎日新聞西部版	5月20日		民謡 “八月踊り” に 旅情を慰さむ 名瀬町の學術研究團一行 けさ鹿兒島上陸		
23 筑後新聞	5月22日		南島十島民の 虐げられたる生活 學術的に多大の収穫 十島學術探訪團長澁澤子語る		
24 大阪毎日新聞	5月18日		珊瑚の島、樟榔の密林に ふくらむ獵奇袋 學界へのお土産とつさり 十島調査團 歸途につく		
25 大阪毎日新聞	5月18日		武陵桃源の島民 「黒潮に乗る昆虫」の珍 諸權威・數々の収穫を語る		
26 (紙名不明)	(日付不明)		島の旅 京都帝大講師 三宅宗悦 (下)		

新聞名	日付	サブタイトル	サプタイトル	タイトル	記者名ほか	備考
27 大阪毎日新聞	5月16日	奄美十島の謎の扉を叩く	奄美十島の謎の扉を叩く	俊寛の昔をしのぶ 戀の卓履とかんざし 幽艶極まりない平家の遺風 一原始的な南島情緒	南特派員	
28 大阪毎日新聞	5月16日以降			貴重な資料発見 一行口之島に着く	南特派員	
29 大阪毎日新聞	5月21日	奄美十島を描く	奄美十島を描く	暗着の乙女も 哀し誓ひの裸足 【A】 いまに残る共産制一竹島	南特派員	
30 大阪毎日新聞	5月23日	奄美十島を描く	奄美十島を描く	ありし昔を夢に 平家榮華の跡 安徳帝を初め奉り俊寛など 傳説の秘庫 硫黄ヶ島	南特派員	
31 大阪毎日新聞	(日付不明)	奄美十島を描く	奄美十島を描く	ガジマルの葉蔭に 青春を謳ふ群 珍説二羽鳥 床しや紅花 踊る島の人々	南特派員	
32 大阪毎日新聞	(日付不明)	奄美十島を描く	奄美十島を描く	十三乙女の春に 鐵漿・黒々と 離島文化の中心 中の島 怒る諏訪の瀬火山	南特派員	
33 大阪朝日新聞	5月21日			酷暑と海嘯を制服 お土産どっさり 三宅講師の人種論に郡民朗か 南東學術探訪隊 鹿兒島へ歸る	鹿兒島にて 榎並特派員發	
34 大阪朝日新聞	5月22日	奄美十島を探ねて	奄美十島を探ねて	結婚難知らぬ 竹、竹の竹島 島の娘はみんな婚約済み 畑は娘の働きどり 遠は鬼界ヶ島 轍に湯かけてベロロリ 傳説に彩られた硫黄島	(榎並特派員)	記者名は推定
35 大阪朝日新聞	(日付不明)	奄美十島を探ねて	奄美十島を探ねて	嘈煙に脅えつゝ、絶ちきれぬ土への愛着 鰐船の入港もグツと減つて 淋しい口ノ永良部島 躍る黒潮に 島の娘は唄ふ 獨木舟を操つての嫁貰ひ 口之島は平家の流れ	榎並特派員	
36 大阪朝日新聞	(日付不明)	奄美十島を探ねて	奄美十島を探ねて	村の汽船が運ぶ 佐しい文化の波 都びて辛くなる暮し向 繁榮へ急ぐ中之島 山は唸る一賣り物の島 深夜に躍り狂ふ歓迎の男女	榎並特派員	
37 大阪朝日新聞	(日付不明)	奄美十島を探ねて	奄美十島を探ねて	濱で拾ふ珍珠 海亀の卵 人は百四十八人だが米も實り蛙や雀も見られる 百合かをる平島 えらぶ巒が 生命の綱 だが島人は捕らず食はず 子寶嶽山の小寶島	榎並特派員	
38 大阪朝日新聞	(日付不明)	奄美十島を探ねて	奄美十島を探ねて	赤い髪飾りつけて 老婦がならりの帯 ハブに四回も噛まれた命冥加な男 島と間違へた寶島 戀も占ふ巫女 鼠よけ高倉の行列 ハパイヤ繁る大島	榎並特派員	
39 大阪朝日新聞	(日付不明)	南海奄美十島	南海奄美十島	炎熱と海嘯の蔭に 潜む同胞の呼吸 懐しや『古い日本』そのまま、學術探訪隊歸る 科學の巖奇行 島巡り	榎並特派員記	

(1) 新聞

薩南十島調査に関する新聞による報道は少ないながらも、先に紹介した宮本馨太郎『十島雜綴』の中に附録として綴じられた「十島探訪隊関係新聞記事切抜帳 昭和九年五月編」に収められたものが確認できる(表7)。以下に引用するのは表7のうちNo.1の鹿児島朝日新聞の記事であるが、当時この調査に関して渋沢が語ったことが文字として残されているものは少なく、調査に至る経緯や考え方を知る上では貴重な記事である⁽¹⁵⁾。

「自分(渋沢/筆者註)の興味から、知り合ひの人々を誘つたゞけで、言はゞ豫ねて御當地の永井さん(龍一氏)からお薦めがあつたのと、十島丸が出来上つたのが縁となつて出掛けたやうな譯です、勿論私は何も判りませんが、學界の權威即ち生きた百科全書の後について歩くだけのことで最初は内輪の仕事として全く趣味的に企てたものでしたが、新聞などに大きく書き立てられたので弱つてゐるところです」「(一行の各氏は/筆者註)各島僅かに三四時間位の滞在で詳細の調査が出来ものでない最も動物や植物殊に渡り鳥や昆蟲などに就ては同地が亞熱帯と温帯との境界となつて居るので面白いものが見出せるかも知れないが要するに世間が大きな期待を持ち過ぎるとすれば、それは私共の大きな迷惑である、此の次に再びお出でになる人達の足がかりを作れば良いのだ」

文字通り受け取るならば、「學界の權威即ち生きた百科全書」とは述べているものの、「知り合ひの人々を誘つたゞけ」の参加者で、「此の次に再びお出でになる人達の足がかりを作れば良い」という程に「内輪の仕事として全く趣味的に企てたもの」という位置づけの調査だったのである。「動物や植物殊に渡り鳥や昆蟲など」については「面白いものが見出せるかも知れない」が学際的な共同調査の嚆矢という程の目的意識は渋沢の言葉からは感じられない。

大阪毎日新聞の南記者と大阪朝日新聞の榎並記者が同行していることについては既に見た通りであるが、表7のNo.10からは大島新聞の柏田記者という名前も見られ、奄美大島での一行に随行していることがうかがわれる。これらのスクラップは調査報告書が刊行されなかった十島調査団の具体的な行動・調査旅程を把握する上で貴重な資料となっている。

また見出しを概観すると、記事を大きく2つに分けることができる。速報性の高いニュースとしての記事、そして大阪毎日新聞と大阪朝日新聞での複数回にわたる読み物としての記事である。十島丸就航以前の十島の生活状況が厳しいものであったことは確かであるが、「現代科學の力により南島の秘庫は開く」(鹿児島朝日5月14日付)、「南島十島民の 虐げられた生活」(筑後新聞5月22日付)、「原始的な南島情緒」(大阪毎日新聞5月16日付)、「懐しや『古い日本』そのまゝ 學術探訪隊歸る 科學の獵奇行 島巡り」(大阪毎日新聞日付不明)など、読み物としての記事の見出しからは、当時の一般の購読者層が奄美や十島、そして離島に対してどのようなイメージを抱いていたのかを垣間見ることができる。渋沢が「面白いものが見出せるかも知れない」と期待した自然科学分野における調査成果が上がったことは鈴木や江崎の報告からわかり、それらを報道する向きもあるが、多くは未開の孤島に中央の教授陣が挑むという構図が前提の記事である。

『十島雜綴』には含まれないが、朝日新聞昭和9年5月13日付け東京夕刊には「薩南踏査隊原始的な生活の十島調査にけふ澁澤子等出發」の見出しで東京から那須皓、宇野円空、高橋文太郎とともに特急富士にて鹿児島へ向かったことが記されている⁽¹⁶⁾。また、調査内容については「島民が土地を共有し自給自足をなし近代文明から遠ざかつてゐる原始的な經濟形體の生活を一週間にわたつてつぶさに踏査するもので、この島民生活は一度明治十二年頃に調査記録されてゐるだけで今度の踏査はいろいろな意味で興味をもつてみられてゐる。」としている。13日の夕刊であることか

ら、東京出発前の取材であることが推測されるが、先の「新聞などに大きく書き立てられた」や「世間が大きな期待を持ち過ぎる」といった洪沢の言葉は、明治以降の近代化を推し進める日本の中にあって、こうした「原始的な経済形態の生活」を期待する新聞メディアへの牽制とも言えよう。

(2) 雑誌

山下信一郎「南島風趣 榕樹の葉蔭に木簪の女 十島學術調査團が探訪した奄美大島十島村を語る」『サンデー毎日』昭和9年5月27日号 大阪毎日新聞社

薩南十島調査をいち早く全国的に報じたのがこの『サンデー毎日』で、記名の記者は大阪毎日新聞鹿児島支局の山下信一郎氏である。同氏は薩南十島調査には同行していないことから、同社の南義友記者による連載「奄美十島を描く」や調査団の鹿児島での報告をもとに紙面を構成しているものと考えられる。そのため、本来調査団には加わっていない「土屋喬雄」や「宮本璋」などが調査参加者として記載されているなど、内容の一部に誤りが見られるが、鹿児島へ戻った1週間後に全国へ調査の内容や成果を速報した意義は大きいだろう。

図20 「南島風趣 榕樹の葉蔭に木簪の女 十島學術調査團が探訪した奄美大島十島村を語る」『サンデー毎日』昭和9年5月27日号



(3) テレビ

NHK 「昭和回顧録 薩南諸島・民俗の旅」 昭和54年4月11日放送

出演：小川徹（当時、駒澤大学教授） 下野敏見（当時、鹿児島西高校教諭）

昭和9年当時は当然ながらテレビによる報道はない。「昭和回顧録 薩南諸島・民俗の旅」は昭和54年にNHK（日本放送協会）が放送した、アチックフィルム『十嶋鴻爪』をもとに調査の行程を追いながら小川徹が当時の様子を説明し、下野敏見が芸能や民具の解説をおこなった約30分の番組である。小川は島々での調査について番組内で次のように振り返っている。各島に「上陸したら、その専門に応じて四方に散ってしまうわけです」「正直言って踊りなんかは東京に帰ってフィルムを見せられるまで知らなかったですね」といい、「私は、高橋（文太郎／筆写注）さんという方がいましてね、その方が主に民具を集める担当で、私はその助手でございまして」「その方についてずっとまわっていました」「みなさん学校に集まるから、（訪問先の家々での民具収集に／筆者注）非常に苦労しました」と述べている。

先に紹介したように、高橋は「奄美十島及大島に於る民具 一主として運搬具と仕様法一」の中で、表3のとおり家々をまわりながら調査時点でも使用されていた運搬具などの写真を撮影している。また釜屋などの家屋内の写真が多いのも、島民が多く集まる場所ではなく家々をまわって民具の収集をおこなっていたことの裏付けである。小川の「薩南十島 家・畑・水」も記録したノートから

の「貧しい回想記」というものの、民具の収集の助手といえども家々をまわらなければ著すことができなかつたものであろう。

小川はまた、薩南十島調査と「昭和回顧録」への出演について、次のように述べ宮本記念財団ホームページで公開されている⁽¹⁷⁾。

(前略) 村営船の十島丸での薩南トカラ列島の旅行は、私にとってアチックでの最初の探訪旅行であったから、よく覚えている。5月13日にわれわれは鹿児島島に着き、夜半乗船。払暁、船はすでに鹿児島湾上を走っていた。

この時の調査団は総勢20名に達する大がかりなものであったが、九大小出満二、東大那須皓、宇野円空、北大の鈴木醇などの教授陣に、早川孝太郎、永井亀彦・竜一兄弟まで当代の錚々たる学者が一等船室におさまり、桜田勝徳・岩倉市郎・村上清文・宮本馨太郎・私など若輩組は船底の二等船室を占領してずいぶんと賑やかであった。調査団長の渋沢敬三先生が撮影し、みずから編集した記録『十島鴻爪』が、最近NHKの「昭和回顧録」の番組に登場して、まったく45年ぶりにフィルムを見た。この種のフィルムの保管については宮本さんはたいへん骨を折っていられたようであるが、それが放映される直前になって、体調に異変を感じ、私に代理の交渉をして入院されたもので、思えばこの時の電話の声にいつもの張りがなく、また、用件だけで早々に切れてしまったのも、今になると思ひ当たる。このフィルムでは宮本さんも私らも上船・下船、それに記念撮影の場を除いて写っていない。共同調査といっても、上陸すれば宮本さんは服飾、私は高橋文太郎さんの助手であったから、終始いっしょというわけでもなかった。ただ、奄美大島のどこだったか、神社に参拝した時、北大の鈴木先生が打たれた拍手の音が巨躬に似合わず小さかったのが、なんともユーモラスで、隣にいた宮本さんが思わずクスリと笑いをもらしたことを覚えている。

薩南十島調査には岩倉市郎は参加しておらず、45年前の記憶の齟齬といった部分も見られるが、アチックフィルムの『十島鴻爪』が渋沢敬三によって撮影・編集されていたことが明らかにされている。また「昭和回顧録」への出演は宮本馨太郎の代理であったことも述べられている。

さて、渋沢が報告書の「公刊の機を失したのはいまもって残念である。」と回想したことは先に紹介したとおりだが、どの程度アチックから公刊する意欲があったのかはわからない。アチックからは彙報やノートなど数多くの出版物が刊行されており、その巻末には刊行書目が掲載されている。アチックの出版については別稿に譲るが、ここにも薩南十島調査の報告書が「近刊」としてその刊行計画の中に現れたことは一度もない⁽¹⁸⁾。本章4・5節では島々からの準備資料や調査参加者による報告を、6節ではメディアでの報道について見てきたが、これらをまとめただけでも報告書としては相当な分量となる。アチックからの報告書の刊行がなされなかった理由についての詳細は不明であるが、先に述べたとおり早川をはじめとした九州帝大での動きを視野に入れていたからなのであろうか。あるいは、各自での発表を当初より期待していたのであろうか。この点については今後の課題としたい。

4. 「アチック写真」に見る薩南十島調査

1) 薩南十島調査のアチック写真

さて、前章では薩南十島調査や参加した各研究者の成果を中心に見てきたが、本章ではアチックに残された調査時の写真を見ていきたい。現在われわれがアチック写真と呼ぶもののうち、アルバム9～13に薩南十島調査の紙焼き写真の多くが含まれている。写真は、ナンバリングが押されキャプションの書かれた台紙に貼られてアルバムに綴じられていた。総数は450枚程⁽¹⁹⁾、多くは台紙に書き込まれたキャプションと、種々の情報と突き合わせることで撮影者や撮影日時、撮影場所、被写体についての何らかの情報を得ることができ本目録としてまとめることができた。アチック写真・本目録については小林氏の解説を参考にさせていただきたいが〔小林 2014：13-22〕、ここではそれらに基づいて、各参加者の調査での視点を見ていきたい。

2) 撮影者の視点

ここでは薩南十島調査のアチック写真のうち、現地で写され撮影者が判明しているものについて、被写体の分類を試みた。写真＝調査の記録という観点から、何が写されているのかを見ることによって、各参加者の調査での視点（あるいは主眼）を確認し、その後の写真利用に至るまでを見てみたい。

なお、詳細な被写体についてはアチック写真の本目録に譲り、ここでは分類項目を大きく被写体別に「モノ」「人」「風景」と便宜的に分類し、用途を「冊子」「記念」「映像」とした。各項目に含めた被写体は次の通りである。

「モノ」… アチックの主要な調査テーマである民具や島々での生産品などを「モノ」とした。ここにはさらに「モノ」が収納される家屋や周囲の環境（背景）から切り取られる形で撮影された小祠・墓なども含めた。

「人」… 「モノ」の使い手である薩南十島で暮らす「人」もまたアチックの調査において関心の高かったものである。籠などの「モノ」を使う場面を再現し、「人」とともに撮影した写真も多い（この場合は両項目に該当とした）。

「風景」… そして海上からの島や集落の遠景、島内の植生、水場や墓など、周囲の空間とのつながりが見えるように、広く写されたものを広く「風景」とした。谷口や竹内といった自然科学系の参加者による写真の多くはここに含まれるものが多い。

「冊子」… 用途については結果論となる部分も多いが、後の利用を念頭において撮影されたものもあると考え、3章5節で紹介した調査参加者による調査後まもない報告に掲載されたものを「冊子」とした⁽²⁰⁾。

「記念」… 判断の難しい分類であるが、集合写真や船上での一行の様子などの調査の参加記念に撮影されたものや、現地の方々が整列して写っているようなものを「記念」として含めた。

「映像」… 二次的な写真の利用になるが、アチックフィルム『十嶋鴻爪』とつぎあわせ映像のインデックスとして利用可能なものを「映像」とした。

このように被写体と用途を分類し、調査参加者それぞれのアチック写真を分類したものが表8である。一枚の写真が複数の項目に該当するものもあり、写真の総枚数と被写体の該当数の合計は合致しない。各調査参加者の写真の傾向を見ると以下のようなになる。（表9～18は筆者による分類一覧であり、表8の根拠となる。）

(1) 高橋文太郎 (表9)

薩南十島調査に先立って訪問した、桜島を含めて、ほぼすべての行程において、「モノ」「人」「風景」をまんべんなく撮影している。3章5節で紹介した高橋の報告である「奄美十島及大島に於る民具一主として運搬具と仕様法一」で使用した写真も多く、細かなメモをとりながらの撮影であったこともうかがわれる。撮影と同時に民具の収集を行っていたことはすでに確認したとおりであるが、「助手」として行動を共にしていた小川徹が被写体として高橋の写真に登場することはない。

(2) 桜田勝徳 (表10)

船(「モノ」に分類)や島影や集落の写真が多く、「人」はほとんど写していない。「冊子」に使用したのは、薩南十島調査後に初めて訪れた隠岐の報告である『隠岐島前に於ける 糸満漁夫の聞書』においての2枚のみである。漁業を中心とした桜田自身の研究に引きつけた写真が中心であるが、硫黄島では高橋と同じ被写体を写しているものもあり、行動を共にしていたことがわかる。高橋が「人」を含めて撮影しているのに対し[アチック写真目録番号:ア-9-60]、桜田は除いて撮影している[アチック写真目録番号:ア-9-59]点は興味深い。

(3) 村上清文 (表11)

ネガと紙焼きの対になるものがほとんどで実質の撮影枚数は半分となる。[アチック写真目録番号:写3-4-2]は平島の水田を写したネガであるが、ネガの中心部に水平方向に傷のような線が見られる。こうした傷は渋沢が撮影した写真のネガにも見られることから、村上の写真の多くは渋沢のカメラを使用していたと推測される。

(4) 宮本馨太郎 (表12)

9.5ミリフィルムのパテベビーを用いて映像の撮影をしていたこともあり、薩南十島調査におけるアチック写真には宮本によるものはほとんど含まれていない。その各島における写真は映像撮影の合間に行っていたものと考えられるが、アチック写真に含まれた唯一のものは宝島の前田助之進宅で採集したサシゲタ・シンノウエタゲタである。この下駄については「露卯下駄の終焉」(『史苑』22巻1号)に詳しいが、紙面には別の写真が掲載されている⁽²¹⁾。

(5) 江崎悌三 (表13)

江崎の写真には島の遠景、稜線、植生および建築物が多くみられ、「人」が写るのは島々で披露された踊りがほとんどである。調査行程中、事前の知らせなく立ち寄った諏訪之瀬島での写真が含まれるのは江崎と高橋のみであるが、これは夕闇の中で撮影可能なカメラを持っていたのが両名だけだったことを示しているのであろうか。硫黄島では江崎の写真に竹内、永井、木村と村民が写るもの[目録番号:ア-9-83]、口之島や平島では永井亀彦が写るもの[アチック写真目録番号:ア-9-100、ア-11-011]がありそれぞれ同一の行動をとっていたことがわかる。また全体を通して、撮影枚数に比して「映像」とリンクするものが多く、『十嶋鴻爪』を撮影していた渋沢と同じ場面にもいたこともうかがわれる。鈴木醇「吐噶喇火山群島を廻りて」、早川孝太郎「踊りの着物 一薩南十島にて一」と他の参加者へ写真を提供しているのは江崎のみである。

(6) 三宅宗悦 (表14)

島によって撮影枚数のばらつきはあるものの、三宅の写真は「風景」を中心に「人」を写したものが多くを占めている。「モノ」の写真は船を被写体にしたもの以外は少ない。江崎同様に「映像」とリンクするものが多い。

(7) 谷口熊之助 (表15)

撮影枚数はそれほど多くないが、植生を中心に各島でまんべんなく撮影しており、江崎・三宅同様に映像とのリンクも比較的多い。加計呂間島での写真が残されているのは三宅と谷口の両名だけで

ある。

(8) 竹内亮 (表 16)

竹内の写真は、宝島での調査団の記念写真と中之島の踊り、硫黄島の上陸時以外に人は写らず、ほぼ各島の植生やそれを含む「風景」の写真である。自身の専門に即した調査写真であり、後の報告「吐噶喇列島植物瞥見」でも写真が使用されている。「映像」とリンクするものも少ない内容となっているが、平島では江崎や永井亀彦と同行していたことがわかる写真 [アチック写真目録番号: ア-11-011] や同一の被写体をとらえたもの [アチック写真目録番号: ア-11-016、ア-11-018] がある。

(9) 大西伍一 (表 17)

全体的に枚数が少ないものの「風景」と「モノ」を中心に撮影している。「モノ」といっても、小祠や高倉などの建築物の拡大写真が多く、いわゆる民具は少ない。島々の生活の場面を切り取った写真が多い印象を受ける。

(10) 渋沢敬三 (表 18)

渋沢の手による写真と判明しているものは 8 枚であるが、すべてネガと紙焼きの対になるもので実質は 4 枚である。村上の写真でも述べたように、ネガの中心部に水平方向に傷のような線が見られる。写真はすべて小宝島の島民を写したもので、ここでは「記念」と分類したが、小林氏によれば、被写体となっているのは「イトマン」とよばれた奄美以南より移住してきた人々を撮影しているとのことである⁽²²⁾。映像に加えて写真も撮影しており、確実に記録を残したいということであろうか。

雑駁な分類であり、調査参加者の写真もすべてがアチックに提供されているわけではないが、こうして各参加者の写真を並べ大まかに分類を試みると、アチック同人であってもそれ以外の参加者であっても、まんべんなく撮影する者もあれば、自己の研究についての興味関心を中心に撮影する者もあり、各人の島々での動きや調査対象としていたものが見えてくる。詳細な分類、特に自然科学系の参加者の被写体については筆者の力の及ばない点であるが、本章ではグループや個人といった行動の別、あるいは島内を巡るにあたっての参加者の組み合わせの他、報告として文章にまとめられたもの以外の調査参加者の視点を確認することができた。

表9 アチック写真 内容別内訳 (高橋文太郎撮影)

題名は本日録による。表10~18も同様。

目録番号	題名	被写体			冊子	用途	
		モノ・建物	人	風景		記念	映像
ア 13 39	鹿児島市内の桜島へ帰る物売りの女性	○	○				
ア 13 40	鹿児島市内の籠を売る桜島の娘	○	○				
ア 13 41	鹿児島市内の果物を売る桜島の女性	○	○				
ア 13 42	鹿児島市内の市場の商い籠	○	○				
ア 13 43	鹿児島市内の市場	○		○			
ア 13 44	桜島のみかん畑			○			
ア 13 46	桜島の墓			○			
ア 13 47	桜島の井戸と水神			○			
ア 13 48	桜島のオシエボラ (お潮井)			○			
ア 13 49	桜島の手桶	○					
ア 13 50	桜島の木杵	○					
ア 13 51	桜島の木碇	○					
ア 13 52	桜島のテゴ	○					
ア 13 53	桜島のカルイ (オイコ)	○	○				
ア 13 54	桜島のカルイとカゴを持つ女性たち	○	○				
ア 13 55	桜島の軒下のカゴ	○					
鹿児島・桜島 小計		12	6	5	0	0	0
ア 9 2	十島丸より竹島を望む			○			○
ア 9 16	竹島の泉			○			
ア 9 20	竹島の竹垣の前にたたずむ女性と子供		○	○			○
ア 9 24	竹島の民家の炊事場であるカマヤ (ナカキ)	○	○		○		
ア 9 25	柄杓ですくった水で食器を濯ぐ女性と竹で作られた食器棚	○	○				
ア 9 26	竹島の民家のヨコザの部屋	○	○		○		
ア 9 27	竹島のカミヤボ	○					
ア 9 30	竹島の小学校にて、お膳を運ぶ婦人		○				
ア 9 31	竹島の小学校前に集まる子どもたち挨拶をする男性		○				○
ア 9 32	竹島の小学校前に集まる婦人		○				
ア 9 33	竹島の竹割り機械	○	○				○
ア 9 36	竹島の漁具	○					
ア 9 39	竹島の背負い梯子		○				○
ア 9 40	テゴを背負う竹島の女性	○	○		○		
ア 9 41	ノリテングを背負う竹島の女性	○	○		○		
ア 9 42	竹島の木車	○			○		
竹島 小計		10	10	3	5	0	5
ア 9 43	北側海上より硫黄島と硫黄岳を望む			○			○
ア 9 48	硫黄島の硫黄島港と矢筈岳を後方に望む			○			○
ア 9 58	硫黄島の海岸入浴			○			
ア 9 60	硫黄島のウーカワ		○				
ア 9 67	硫黄島の檳榔と甘藷小屋	○		○			
ア 9 69	硫黄島の子ども達		○	○		○	
ア 9 72	硫黄島のカラスオドリ	○	○				
ア 9 73	硫黄島の家屋のヨコザ (爐のある部屋)	○					
ア 9 88	硫黄島の島民		○			○	
ア 9 89	籠を背負う硫黄島の子ども達	○	○				
ア 9 90	ウスとテギネを持つ硫黄島の子ども	○	○				
ア 9 91	硫黄島の民家のカマド	○					
ア 9 92	硫黄島の甘藷団子 (ゴロダンゴ)、繊維下し (センオロシ)、シヨーケ、カタクチジョーケ	○			○		○
ア 9 93	硫黄島の硫黄採取用カルイ (背負梯子)	○			○		
硫黄島 小計		8	6	5	2	2	3
ア 13 34	口之永良部島遠景			○			
ア 13 36	口之永良部島の共同井戸	○	○				
ア 13 38	口之永良部島の子守		○			○	
口之永良部島 小計		1	2	1	0	1	0
ア 10 2	口之島での調査団一行を歓迎する島民		○	○			○
ア 10 25	口之島の高倉			○			
ア 10 26	口之島の民家と道			○			
ア 10 32	口之島の老女の晴着		○			○	
ア 10 33	口之島の老女の晴着		○			○	
ア 10 34	島染めの着物を着る口之島の老女		○			○	
ア 10 35	テゴを持つ子どもと民家の軒先にかかる餅を入れるツト	○	○		○	○	
ア 10 36	口之島の島染の着物		○				
口之島 小計		1	6	3	0	4	2
ア 10 71	中之島の集落を歩く女性と子ども		○	○			
ア 10 72	中之島港の集落を望む			○			
ア 10 77	中之島の島中社	○		○			
ア 10 87	中之島の高砂踊		○				○
ア 10 95	中之島の子ども達カ		○				
ア 10 96	中之島の子ども達と赤子を背負う女性		○		○	○	
ア 10 97	中之島の子ども達		○		○	○	
ア 10 105	中之島のカルイとテゴ類	○			○		
中之島 小計		2	5	3	2	2	1
ア 11 5	諏訪之瀬島の盆踊り		○				
ア 11 7	諏訪之瀬島の開祖藤井家	○	○				
諏訪瀬島 小計		1	2	0	0	0	0

目録番号			題名	被写体			用途	
				モノ・建物	人	風景	冊子	記念
ア	11	21	平島の人々の服装		○			○
ア	11	22	平島の子どもの服装		○		○	○
ア	11	23	平島の子どもの服装	○	○		○	○
ア	11	24	平島の立杵で搦白をつく女性	○	○			○
ア	12	84	平島の女性と子どもの髪型		○			○
平島 小計				2	5	0	2	4
ア	11	26	船上より小宝島遠景			○		
ア	11	27	船上より小宝島遠景			○		
ア	11	35	小宝島からの小島近景			○		
ア	11	51	小宝島のアダナギ (アダン)			○		
ア	11	68	小宝島の小学校	○		○		○
ア	11	71	小宝島の糸満の家	○		○		
ア	11	77	小宝島の島民の記念写真		○		○	
ア	11	82	小宝島の糸満人の頭上運搬	○	○		○	
ア	11	83	小宝島のコバミノ	○	○			○
ア	11	85	小宝島のイサ	○				○
ア	11	86	小宝島のイサ	○				○
小宝島 小計				6	3	6	1	4
ア	12	6	宝島 珊瑚礁上から望む船着き場や日の丸を掲揚する広場に集まる島民			○		
ア	12	12	宝島 珊瑚礁上の放牧場と馬			○		○
ア	12	13	宝島 珊瑚礁上の放牧場			○		
ア	12	14	宝島 珊瑚礁上の放牧場			○		
ア	12	18	宝島の水田			○		
ア	12	35	宝島の神職の息子夫婦		○		○	
ア	12	41	薪を頭上運搬する宝島の女性	○	○			
ア	12	42	テゴを頭に載せた宝島の女性	○	○		○	
ア	12	44	宝島の砂糖を運搬する荷車	○				
宝島 小計				3	3	5	1	1
ア	12	49	奄美大島名瀬町でタケノコ (マダケ) を売る人	○	○			
ア	12	50	奄美大島名瀬町の山苺売り	○	○			
ア	12	51	奄美大島名瀬町の甘藷	○				
ア	12	60	奄美大島住用村城の民家と垣	○	○			
ア	12	62	奄美大島住用村城のテルを額で負う手に入れ墨を入れた老女	○	○			
ア	12	64	奄美大島住用村城のテルを負う少女	○	○			
ア	12	65	奄美大島名瀬町海岸での葬列		○	○		
ア	12	66	奄美大島住用村城のノロ (巫女)		○			
ア	12	67	奄美大島住用村見里の割り風呂	○				
ア	12	80	奄美大島住用村見里のトウネ (丸木の水槽)	○				
ア	13	19	奄美大島大和村恩勝のアイノコ	○		○		
ア	13	20	奄美大島大和村恩勝のアイノコ	○	○			
ア	13	23	奄美大島大和村恩勝の処女会の女性達		○		○	
ア	13	24	奄美大島大和村恩勝のテルを背負う男性	○	○			
ア	13	25	奄美大島大和村恩勝の高倉の戸口	○				
ア	13	27	奄美大島大和村恩勝の糶摺り白	○			○	
ア	13	29	奄美大島大和村恩勝のクルマ	○				
河1	4	11	アミクッ (筈)	○				
奄美大島 小計				15	10	2	1	0
高橋文太郎撮影写真 合計				61	58	33	14	20

表 10 アチック写真 内容別内訳 (桜田勝徳撮影)

目録番号	題名	被写体			用途		
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念	映像
ア 13 45	桜島の枇杷採集			○			
	鹿兒島・桜島 小計	0	0	1	0	0	0
ア 9 4	竹島のフネクラ	○		○			
ア 9 22	ホンアジロで編まれた竹島の家屋の壁	○					
	竹島 小計	2	0	1	0	0	0
ア 9 45	北側海上より硫黄島と硫黄岳を望む			○			○
ア 9 50	硫黄島の硫黄島港と矢筈岳を後方に望む			○			○
ア 9 59	硫黄島のウーカワ			○			
ア 9 77	硫黄島の太鼓踊り		○				○
	硫黄島 小計	0	1	3	0	0	3
ア 9 101	口之島の高倉(クラ)と梯子	○					
ア 10 18	口之島の墓地に立つタマヤ	○					
ア 10 20	口之島の民家	○		○			
	口之島 小計	3	0	1	0	0	0
ア 10 78	草葺きの祠	○					
ア 10 98	中之島の丸木舟の残骸	○					
ア 10 99	中之島の糸満人の舟	○					
ア 10 100	中之島の糸満人のクリ舟、サバニイの艦	○			○		
ア 10 101	中之島の丸木舟	○					
ア 10 102	中之島の糸満人の舟、サバニイの軸	○			○		
	中之島 小計	6	0	0	2	0	0
ア 11 30	船上より小宝島遠景			○			
ア 11 43	小宝島のアダンの茂み			○			
ア 11 60	小宝島の民家	○					
ア 11 87	小宝島のイサ	○					
	小宝島 小計	2	0	3	0	0	0
ア 12 9	宝島 珊瑚礁の船つき	○		○			
ア 12 23	宝島の森林と家屋			○			
ア 12 24	宝島の村			○			
ア 12 45	宝島の漁船	○					
	宝島 小計	2	0	3	0	0	0
ア 12 46	奄美大島の名瀬町の糸満女性		○	○			
ア 12 47	奄美大島名瀬町の糸満女性の唐髷と銀簪		○	○			
ア 13 16	奄美大島大和村恩勝の高倉	○					
ア 13 22	奄美大島大和村恩勝のトネヤ	○	○			○	
	奄美大島 小計	2	3	2	0	1	0
	桜田勝徳撮影写真 合計	17	4	14	2	1	3

表 11 アチック写真 内容別内訳 (村上清文撮影)

目録番号	題名	被写体			用途		
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念	映像
ア 10 69	中之島港付近の集落と丸木舟	○		○			
ア 10 74	中之島の鳥居	○		○			○
ア 10 82	中之島の小学校にて		○	○			
写3 4 8	中之島の小学校にて		○	○			
写3 4 9	中之島港付近の集落と丸木舟	○		○			
	中之島 小計	3	2	5	0	0	1
ア 11 10	平島の水田			○		○	
写3 4 2	平島の水田			○			
	平島 小計	0	0	2	0	1	0
ア 11 63	小宝島の墓地			○			
ア 11 76	小宝島の民家の中庭		○	○		○	
写3 4 1	小宝島の民家の中庭		○	○			
写3 4 6	小宝島の墓地			○			
	小宝島 小計	0	2	4	0	1	0
ア 12 27	宝島の墓地		○				○
	宝島 小計	0	1	0	0	0	1
	村上清文撮影写真 合計	3	5	11	0	2	2

表 12 アチック写真 内容別内訳 (宮本馨太郎撮影)

目録番号	題名	被写体			用途		
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念	映像
ア 12 43	宝島のシンノウエタゲタ	○					
	宝島 小計	1	0	0	0	0	0
	宮本馨太郎撮影写真 合計	1	0	0	0	0	0

表 13 アチック写真 内容別内訳 (江崎梯三撮影)

目録番号	題名	被写体			用途	
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念 映像
ア 13 32	鹿児島岩崎谷荘の樟の大板	○				
	鹿児島・桜島 小計	1	0	0	0	0
ア 9 3	竹島の海岸			○		
ア 9 7	海上に開聞岳を望む竹島小学校裏の林相			○		
ア 9 11	竹島の聖神社			○		
ア 9 19	竹島の小学校			○		○
ア 9 23	竹垣や日章旗が見える竹島の集落			○		
	竹島 小計	0	0	5	0	1
ア 9 44	東側海上より硫黄島と硫黄岳を望む			○		○
ア 9 49	硫黄島の硫黄島港と矢筈岳を後方に望む			○		○
ア 9 53	硫黄島港に停泊する十島丸			○		○
ア 9 54	硫黄島の硫黄岳中腹より矢筈岳を望む			○		
ア 9 55	硫黄島の硫黄岳中腹より稲村岳を望む			○		
ア 9 56	硫黄島の硫黄岳噴火口			○		
ア 9 63	硫黄島の大僧都俊寛を祀る祠			○		
ア 9 74	硫黄島の太鼓踊り		○			○
ア 9 83	硫黄島の硫黄岳頂上にて調査団一行		○			○
	硫黄島 小計	0	2	7	0	4
ア 9 97	口之島のガジュマルの木と永井亀彦鹿児島一中教諭		○	○		○
ア 9 102	口之島の海岸と刎舟の漁船		○	○		
ア 10 7	口之島の小学校から見る前岳			○	○	
ア 10 13	口之島のガジュマル			○		
ア 10 23	口之島の高倉	○				
ア 10 27	口之島の小学校女性による笠踊り		○		○	
	口之島 小計	1	3	4	2	0
ア 10 39	中之島 (西半の南方よりの) 遠望			○		
ア 10 40	中之島 (北方よりの) 遠望			○		
ア 10 41	中之島 (南方よりの) 遠望			○		
ア 10 43	中之島の御岳と中之島港そばの集落			○		○
ア 10 61	中之島のガジュマルに寄生するオオタニワタリ (大谷渡り)			○		○
ア 10 62	中之島のクバ			○		
ア 10 65	中之島の漁獲されたアカウミガメ	○				
ア 10 66	中之島の漁獲されたアカウミガメ	○				
ア 10 67	中之島の漁獲されたアカウミガメ	○				
ア 10 86	中之島の魚踊り		○			○
ア 10 90	中之島の鬼の踊り		○			○
ア 10 91	中之島の俵踊り		○		○	
ア 10 92	中之島の武士踊り		○			
ア 10 93	中之島の俵踊り		○		○	
	中之島 小計	3	5	6	2	4
ア 10 47	中之島からみた諏訪之瀬島			○		
ア 11 2	諏訪之瀬島の北方からの遠望			○	○	
ア 11 4	諏訪之瀬島の藤井富傳の墓	○				
ア 11 6	諏訪之瀬島の盆踊り		○			
	諏訪之瀬島 小計	1	1	2	1	0
ア 11 11	平島の鳥居の上の大きなガジュマルと永井亀彦鹿児島一中教諭		○	○		○
ア 11 18	平島の収穫された竹材			○		
	平島 小計	0	1	2	0	0
ア 11 31	小宝島の隆起珊瑚礁と枇榔の群落			○	○	
ア 11 32	小宝島からの宝島遠望			○		
ア 11 34	小宝島の隆起珊瑚礁上の植物相			○		
ア 11 36	小宝島の隆起珊瑚礁の浸蝕			○		
ア 11 53	小宝島のビロウの林とガジュマルの大木			○		
ア 11 54	小宝島のビロウの群落と小島遠景と十島丸			○	○	
ア 11 56	小宝島の墓地			○		
ア 11 57	小宝島の小学校	○				○
ア 11 65	小宝島の墓地			○		
ア 11 75	珊瑚礁を石材に用いた小宝島の民家	○				
	小宝島 小計	2	0	8	2	1
ア 12 3	宝島 隆起珊瑚礁上の一行と島民		○			○
ア 12 7	宝島 海岸の隆起珊瑚礁			○	○	
ア 12 17	宝島からの小宝島遠望			○		
ア 12 26	宝島の墓地			○		○
ア 12 34	宝島の珊瑚礁を石材に使用した物置小屋	○				
ア 12 39	宝島のハブに咬まれた人		○			○
ア 12 40	宝島のハブに咬まれた人		○			○
	宝島 小計	1	3	3	1	4
ア 12 52	奄美大島名瀬町のハブ屋	○	○			○
	奄美大島 小計	1	1	0	0	0
	江崎梯三撮影写真 合計	10	16	37	8	14

表 14 アチック写真 内容別内訳 (三宅宗悦撮影)

目録番号	題名	被写体			用途		
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念	映像
ア 13 33	昭和9年5月13日 鹿児島駅に到着したアチック・ミュージアム調査一行		○	○		○	
鹿児島・桜島 小計		0	1	1	0	1	0
ア 9 28	竹島の島民		○			○	○
竹島 小計		0	1	0	0	1	1
ア 9 46	南側海上より硫黄島と硫黄岳を望む			○			
ア 9 47	南側海上より硫黄島と硫黄岳、稲村岳を望む			○			
ア 9 51	硫黄島の硫黄島港と小舟			○			○
ア 9 61	硫黄島の墓地			○			
ア 9 71	硫黄島の新墓			○			
ア 9 84	硫黄島の平家の末裔		○				
ア 9 85	硫黄島の平氏の末裔		○				
ア 9 86	硫黄島の島民		○				
硫黄島 小計		0	3	5	0	0	1
ア 10 3	口之島の刎船	○					○
ア 10 4	口之島の刎船	○		○			○
ア 10 5	口之島の刎船	○		○			○
ア 10 6	口之島の刎船	○		○			○
ア 10 8	口之島の御嶽・前岳			○			
ア 10 10	中之島からみた口之島遠景			○			
ア 10 11	口之島の前之浜から北東を望む			○			
ア 10 17	口之島の平の清の森			○			
ア 10 28	口之島の小学校にて女性による笠踊り		○				
ア 10 29	口之島の小学校にて男性による狂言		○				○
ア 10 30	口之島の小学校にて男性による狂言		○				○
ア 10 31	口之島の小学校にて男性による棒踊り		○				○
口之島 小計		4	4	8	0	0	7
ア 10 38	口之島より中之島に向かう十島丸船上			○			
ア 10 44	中之島の御岳			○			
ア 10 45	中之島港付近の集落			○			
ア 10 46	船上から見る中之島			○			
ア 10 49	中之島からみた臥蛇島			○			
ア 10 50	中之島からみた諏訪之瀬島			○			
ア 10 63	中之島のガジュマルに寄生するオオタニワタリ (大谷渡り)			○			○
ア 10 84	中之島の若者の踊り		○				
ア 10 85	中之島の若者の踊り		○				
ア 10 88	中之島の高砂踊		○				○
ア 10 94	中之島の俵踊り		○				○
ア 10 103	中之島の丸木舟	○	○				
ア 10 104	中之島で発見された磨製石斧	○					
中之島 小計		2	5	7	0	0	3
ア 11 3	諏訪之瀬島の山火事			○			
諏訪瀬島 小計		0	0	1	0	0	0
ア 11 20	平島の六本柱の高倉		○				○
ア 11 25	平島の舟と若者		○				
平島 小計		0	2	0	0	0	1
ア 11 28	小宝島に向かう船上の船長と櫻田勝徳		○			○	
ア 11 29	船上より小宝島・小島遠景			○			
ア 11 55	小宝島のコバの森			○			
ア 11 58	小宝島のピロウ			○			
ア 11 66	小宝島の墓地			○			
小宝島 小計		0	1	4	0	1	0
ア 12 4	宝島 記念撮影		○			○	○
ア 12 10	宝島から望む十島丸			○			
ア 12 11	宝島 珊瑚礁所見 生きた珊瑚			○			
ア 12 15	宝島 砂丘			○			
ア 12 16	宝島 珊瑚礁上の放牧場と馬			○			
ア 12 29	宝島の鎮守神社			○			
ア 12 32	宝島の鎮守神社			○			
宝島 小計		0	1	6	0	1	1
ア 12 61	奄美大島住用村城の人々		○			○	
ア 12 63	奄美大島住用村城のテルを負う老婦	○	○				
ア 12 72	奄美大島住用村スタル峠のヘゴ			○			
ア 12 75	奄美大島住用村スタル峠のヘゴ			○			
ア 12 76	奄美大島住用村城のマンガロープ			○			
ア 12 77	奄美大島スタル峠のヘゴ			○			
ア 13 6	奄美大島大和村大和浜の龍舌蘭の花			○			
ア 13 7	奄美大島大和村大和浜のパバイヤ			○			
ア 13 30	十島丸内での調査団一行		○			○	
ア 13 31	十島丸内での調査団一行		○			○	
奄美大島 小計		1	4	6	0	3	0
ア 12 83	加計呂麻島鎮西村生間のソテツの幹を切る老婦	○	○				
加計呂間島 小計		1	1	0	0	0	0
三宅宗悦撮影写真 合計		8	23	38	0	7	14

表 15 アチック写真 内容別内訳 (谷口熊之助撮影)

目録番号	題名	被写体			用途		
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念	映像
ア 9 5	竹島の島民のアチック・ミュージアム一行への歓迎		○	○			
ア 9 10	竹島の竹垣に掲げられた日の丸の前に行く渋沢敬三			○		○	○
ア 9 17	竹島の硫黄島小学校分教場		○	○			○
ア 9 21	竹島の竹垣に隣接するソンドと釜場や風呂	○		○			
竹島 小計		1	2	4	0	1	2
ア 9 70	硫黄島の集落附近の耕地			○			
ア 9 76	硫黄島の小学校から硫黄嶽を望む			○			
ア 9 80	硫黄島の太鼓踊り		○				○
ア 9 81	硫黄島の小学校前に集まる島民		○	○			○
ア 9 82	硫黄島の小学校前に集まる女性と子ども達		○	○			
硫黄島 小計		0	3	4	0	0	2
ア 13 35	口之永良部島の噴煙をあげる新岳			○			
		0	0	1	0	0	0
ア 9 94	口之島における調査団一行を歓迎する島民の様子		○	○			○
ア 9 96	口之島の紅花畑		○	○		○	
ア 10 12	口之島の耕地に植わる水芋			○			
ア 10 21	口之島の耕地にある作小屋		○	○		○	
ア 10 22	口之島の高倉	○		○			
口之島 小計		1	3	5	0	2	1
ア 10 51	中之島の原野を開墾して掘り出されて積み重ねられた小石の山			○			
ア 10 52	中之島の廃棄されて荒廃する噴火口湖を利用した耕作地			○			
ア 10 53	中之島の水芋田、七島藺田、糸芭蕉畑			○			
ア 10 54	中之島の水田			○			
ア 10 55	中之島の原野を開墾して掘り出されて積み重ねられた石の山			○			
ア 10 64	中之島のワアンバラとシチトウイ			○			
ア 10 68	中之島の大亀	○					○
ア 10 81	中之島の小学校の校庭の花壇	○					○
中之島 小計		2	0	6	0	0	2
ア 11 9	平島の水田地方			○			
ア 11 19	平島の神山			○			
平島 小計		0	0	2	0	0	0
ア 11 37	小宝島の珊瑚礁原			○			○
ア 11 59	小宝島の大榕樹 (ガジュマル)			○			
ア 11 62	小宝島の村の中の道			○			
ア 11 69	小宝島の小学校	○					○
小宝島 小計		1	0	3	0	0	2
ア 12 5	宝島珊瑚礁上にて十島調査団集合写真		○			○	○
ア 12 8	宝島 船着場 珊瑚礁床を開墾して内部の水溜と通し艇行に便ず		○	○			
ア 12 25	宝島の水井戸			○			
ア 12 28	宝島の墓地			○			○
ア 12 36	宝島のオヤシユ、手伝		○			○	
宝島 小計		0	3	3	0	2	2
ア 12 59	奄美大島住用村のテイチ木の運搬		○	○			
ア 12 70	奄美大島住用村の自生のマングローブ			○			
ア 12 74	奄美大島住用村スタル峠のヘゴ			○			
ア 13 4	奄美大島大和村大和浜の糖祖直川智が甘蔗を試作した所			○			
ア 13 8	奄美大島大和村の糖祖直川智翁旧居跡と群倉			○			
ア 13 14	奄美大島大和村の民家	○					
ア 13 15	奄美大島大和村の群倉	○					
ア 13 17	奄美大島大和村役場近くの民家	○	○	○			
ア 13 18	奄美大島大和村恩勝の開饒神社	○					
ア 13 21	奄美大島大和村の天然林			○			
奄美大島 小計		4	2	7	0	0	0
ア 12 81	加計呂麻島鎮西村諸鈍のノギヤ (オクラ)	○					
ア 12 82	加計呂麻島鎮西村生間のソテツ粗デンプン製造風景	○	○				
加計呂麻島 小計		2	1	0	0	0	0
谷口熊之助撮影写真 合計		11	14	35	0	5	11

表 16 アチック写真 内容別内訳 (竹内亮撮影)

目録番号	題名	被写体			用途	
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念 映像
ア 9 6	竹島より硫黄島を望む			○		
ア 9 8	竹の生える竹島の植生			○	○	
ア 9 14	竹島の樹木と植生			○		
ア 9 15	竹島の竹垣と畑			○		
ア 9 68	竹垣や日章旗が見える竹島の集落			○		
竹島 小計		0	0	5	1	0
ア 9 52	硫黄島港に停泊する十島丸と上陸用の小舟に乗った調査団一行			○		○
ア 9 57	硫黄島の硫黄岳噴火口			○		
硫黄島 小計		0	0	2	0	1
ア 9 95	口之島の小学校から見る前岳			○		
ア 9 98	口之島の紅花			○		○
ア 9 99	口之島のアダン			○		
ア 9 100	口之島のガジュマルと調査団メンバー		○	○		
ア 10 9	口之島の植生			○		
ア 10 14	口之島のユリ	○		○		
ア 10 15	口之島のガジュマル			○		
ア 10 16	口之島のガジュマルと水の貯まった池			○		
ア 10 24	口之島の高倉	○		○		
ア 10 37	口之島の浜			○		
		2	1	9	0	1
ア 10 48	中之島からみた諏訪之瀬島			○		
ア 10 56	中之島の畑			○		
ア 10 58	中之島のガジュマルに寄生するオオタニワタリ (大谷渡り)			○	○	○
ア 10 59	中之島のガジュマル			○		
ア 10 60	中之島のツツジ			○		
ア 10 83	中之島の盆踊り		○	○		○
ア 13 59	中ノ島の御岳と集落			○		
中之島 小計		0	1	6	1	2
ア 11 12	平島の鳥居の上の大きなガジュマル		○	○		○
ア 11 13	平島のガジュマル			○		
ア 11 14	平島の水イモ			○		
ア 11 15	平島のアザミ			○		
ア 11 16	平島の竹の束			○		
ア 11 17	平島の竹垣			○		
平島 小計		0	1	6	0	1
ア 11 33	小宝島からの宝島を望む海岸の様子			○		
ア 11 38	小宝島の珊瑚礁と十島丸			○		○
ア 11 42	小宝島の珊瑚礁			○		
ア 11 44	小宝島のピロウの林			○		
ア 11 45	小宝島の放牧地			○		
ア 11 46	小宝島のアダンの茂み			○	○	
ア 11 47	小宝島の植生			○		
ア 11 48	小宝島の植生			○		
ア 11 49	小宝島のガジュマル			○		
ア 11 50	小宝島のアダン			○		
ア 11 52	小宝島のピロウの林			○		
ア 11 70	小宝島の民家	○		○		
小宝島 小計		1	0	11	1	1
ア 12 2	宝島珊瑚礁上にて十島調査団集合写真		○	○		○
ア 12 20	宝島のサトイモ科の植物			○		
ア 12 21	宝島のサトイモ科の植物			○		
宝島 小計		0	1	2	0	1
ア 12 55	奄美大島名瀬町の植生			○		
ア 12 56	奄美大島名瀬町のハブ	○		○		
ア 12 57	奄美大島名瀬町のテイチ木を運ぶ馬車	○	○	○		
ア 12 69	奄美大島住用村城のヒルギ			○		
ア 12 71	奄美大島の原始林			○		
ア 12 73	奄美大島住用村スタル峠のヘゴ			○		
ア 12 78	奄美大島のバナナ			○		
ア 12 79	奄美大島住用村城のアダン			○		
ア 13 3	奄美大島大和村大和浜遠景			○		
ア 13 5	奄美大島大和村のフクギ			○		
ア 13 9	奄美大島大和村の群倉	○		○		
奄美大島 小計		3	1	10	0	0
竹内亮撮影写真 合計		6	5	51	3	5

表 17 アチック写真 内容別内訳 (大西伍一撮影)

目録番号	題名	被写体			用途		
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念	映像
ア 9 13	竹島の麦畑			○			
ア 9 34	竹島の湧水地			○			
ア 9 35	竹島の竹で作られた食器棚	○					
ア 9 37	竹島の漁具	○					
ア 9 38	竹島の竹割り機械	○					○
竹島 小計		3	0	2	0	0	1
ア 9 64	硫黄島の神社附属の建物	○					
ア 9 65	硫黄島の集落			○			
ア 9 75	硫黄島の後寛の社	○					
ア 9 78	硫黄島の太鼓踊り		○				○
ア 9 79	硫黄島の女性による笠踊り		○				○
硫黄島 小計		2	2	1	0	0	2
ア 10 57	中之島の松の大きな木の下に開墾された畑			○			
ア 10 70	中之島の高倉			○			
ア 10 73	中之島の階段道と高倉			○			
ア 10 75	中之島の小祠	○					
ア 10 76	中之島の神域			○			○
ア 10 79	石と草葺きの祠	○					
ア 10 80	中之島の墓地			○			
ア 10 89	中之島の若者の踊り		○				○
中之島 小計		2	1	5	0	0	2
ア 11 8	平島の放牧地と水田			○			
平島 小計		0	0	1	0	0	0
ア 11 39	小宝島の海岸の珊瑚礁			○			
ア 11 40	小宝島の家畜の水飲場			○			
ア 11 41	小宝島の海岸の放牧地			○			
ア 11 61	小宝島の麦畑と小径			○			
ア 11 64	小宝島の棺桶の上に石が積まれた墓地			○			
ア 11 67	小宝島の密林の中の小祠			○			
ア 11 72	小宝島の集落と榕樹			○			
ア 11 73	小宝島の集落と珊瑚礁で作られた防風用石垣			○			
ア 11 74	小宝島の集落と榕樹			○			
ア 11 84	小宝島の犁	○					
小宝島 小計		1	0	9	0	0	0
ア 13 10	奄美大島大和村大和浜の物置	○					
ア 13 11	奄美大島大和村の青年集会所	○					
ア 13 12	奄美大島大和村の荒廃した高倉	○					
ア 13 13	奄美大島の民家	○					
ア 13 26	奄美大島大和村の初摺白とテル	○					
ア 13 28	奄美大島の麦の精白	○	○				
奄美大島 小計		6	1	0	0	0	0
大西伍一撮影写真 合計		14	4	18	0	0	5

表 18 アチック写真 内容別内訳 (渋沢敬三撮影)

目録番号	題名	被写体			用途		
		モノ・建物	人	風景	冊子	記念	映像
ア 11 78	小宝島の島民の記念写真		○			○	
ア 11 79	小宝島の島民の記念写真		○			○	
ア 11 80	小宝島の島民の記念写真		○			○	
ア 11 81	小宝島の島民の記念写真		○			○	○
写3 4 3	小宝島の島民の記念写真		○			○	
写3 4 4	小宝島の島民の記念写真		○			○	○
写3 4 5	小宝島の島民の記念写真		○			○	
写3 4 7	小宝島の島民の記念写真		○			○	
小宝島 小計		0	8	0	0	8	2
渋沢敬三撮影写真 合計		0	8	0	0	8	2

5. 調査成果とその後への影響

薩南十島調査でアチックが成果として得られたものはなんだったのであろうか。早川を中心とした九州帝大での報告のとりまとめを考慮してか、結果としてアチックからは報告書が刊行されなかったことについてはすでに確認した通りであるが、各島で採集した民具、参加者から提供されたアチック写真と渋沢がおもに撮影し『十嶋鴻爪』としてまとめられた映像はこの調査の主要な直接の成果といえる。さらに3章5節で紹介したように、調査後から2年ほどの間に散発的に出された調査参加者の報告はアチックにとっても、各学界にとってもそれ以前の調査状況を鑑みれば「此の次に再びお出でになる人達の足がかりを作れば良いのだ」というには十分な成果であったといえる。いっぽうで、知友の学者を集めた学際的調査という面で見れば、良くも悪くも初めての運営経験を得たということもでき、その後の昭和10年代におけるアチックの活動に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

薩南十島調査の成否について渋沢が明言したものはない。「二十年前の薩南十島巡り」においても各参加者の様子を述べるにとどまっている。しかし、2章2節で見たように、薩南十島調査以後のアチックでは、一部を除いて学際的な共同調査は行われなくなる。それに先立つように『アチックマンスリー』第1号には、「ハーモニアスデヴエロップメント」の理想から、活動方針の転換を示唆した文章を寄せたのである。もちろん薩南十島調査が失敗であったというつもりは毛頭ないが、この経験をもとにアチックや同人が主体の短期・長期の現地調査、資料整理、調査研究、出版による資料や研究成果の公刊という形に活動が収斂していったと考えられる。子息の雅英氏によれば、渋沢との晩年のやりとりの中で「自分はたいしたことはしなかったけど、十何人の博士を作ったとか、それが自分の最大の喜びであるというようなことをよく言っていました(中略)人が育つのは組織にいるから育つのではなく、大学の先生になったから育つというのではなくて、やっぱり自分でやりたいことを本当にやることで育つのでしょからそういう環境を作ってあげるといことには相当な情熱を持っていたのではないか」とも述べており⁽²³⁾、2章2節でも触れたとおり、最終的には人材の育成というところまでを視野に入れた活動であった。そしてそれを念頭に置き、昭和10年代前半の最も充実した成果を発信した時期のアチックは、すでに研究者として立場を築いている各学会の著名なあるいは渋沢知友の教授陣ではなく、民俗学をはじめとする同人を中心とした次代の担い手による活動に転換していたのである。

6. おわりに

本稿では、アチックの薩南十島調査について、高橋文太郎や桜田勝徳、早川孝太郎といった民俗学と関わりのある研究者はもとより、これまであまり知られることのなかった調査参加者の成果について、アチック写真およびその整理の過程で得られた情報を交えるかたちで確認してきた。それにより、アチックの薩南十島調査について、行程や各参加者がどういった視点を持って調査に臨んでいたのかを些少ではあるが明らかにすることができた。

いっぽうで、「チームワークのハーモニアスデヴエロップメント」という渋沢のことばが、ここ10年来、活動の実態に則した原典の解釈がなされないままに、アチック全体を語る上では必ずといってよいほどに引用されてきたことを指摘した。これについては、玩具収集や奥三河の花祭調査といった昭和初年と、アチック同人による各地での調査が中心となった昭和10年代前半のアチック

クの活動をひとくくりにはできないこと、そのターニングポイントが薩南十島調査であることなどを指摘した。

今回はアチック写真の整理作業で得られた情報をもとに、薩南十島調査を中心としたアチックの活動について見ることができたが、困難を極めたことに調査参加者の報告の収集があった。これだけ図書や学術資料についての情報が手軽に身近に検索できるようになっているにもかかわらず、どうしても筆者自身の専門に偏ってしまい、アチック同人以外の書き残した報告の確認が遅れてしまった。那須皓や大西伍一、小出満二など、まだ確認できていない参加者もいる。調査報告書ができなかったことはアチックにとって残念な結果であったが、学際的な報告書を一冊にまとめることの難しさの一端に触れたように思う。このように渋沢やアチックの全容をとらえることは容易ではないということは明らかではあるが、アチックの調査はこの後も朝鮮多島海や瀬戸内海などと続いており、まずはアチック写真やアチックフィルムに基づく活動実態の明らかにすることを基礎的な作業として今後も取り組んでいきたい。

謝辞

最後まで筆者が所蔵を確認できなかった江崎悌三「吐噶喇列島の蝶類」については、神奈川大学経営学部泉水教授に、その他の調査参加者の残した文献の収集にあたっては神奈川大学平塚図書館堀さんをはじめ、多くの方々にお世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- (1) 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム調査研究資料 4『手段としての写真—「澁澤写真」の追跡を中心に—』では、当時作成中であったアチック写真の目録の一部が掲載されているが、現在の目録番号体系のものではなく、旧番号のものである。またこの時点では「澁澤写真」としていたが、その後の国際常民文化研究機構第一業務によるアチック写真の整理の進展に伴い、渋沢だけではなくアチック同人による写真も相当数あることから、2009 年度刊行の『アチック写真』vol. 1 より改めた。
- (2) アチック写真の目録については、粗目録、仮目録、本目録と整理の段階に応じて目録を充実させながら作成を進めた。[小林 2014: 13-22]
- (3) 拙稿 [羽毛田 2015] では昭和 10 年代前半のアチックの出版活動について、「論文を書くのではない、資料を學界に提供するのである」という渋沢のことばの原典の確認をおこない、アチックでは資料以外の論考も刊行されていたことを確認している。
- (4) 「二十年前の薩南十島巡り」は、渋沢没後 50 年にあたり一般財団法人 MRA ハウスから助成を受けた「渋沢敬三記念事業」の中で、公益財団法人渋沢栄一記念財団および国立情報学研究所連想情報学研究開発センターが協力して開設した「渋沢敬三アーカイブ」の中で全文が公開されている。http://shibusawakeizo.jp/writing/01_05_248.html (平成 26 年 (2014) 8 月 1 日アクセス)
- (5) 十島丸の舵をとった前村与市船長については、前橋松造『金十丸、奄美の英雄伝説 一戦火をくぐった疎開船の数奇な運命—』に詳しい [前橋 2004: 232-240]。同書では薩南十島調査には特に触れられてはいないものの、十島丸就航に至るまでの経緯が、船会社との関係を中心に述べられている。
- (6) アチック写真の中には他の調査参加者が撮影した同場面の記念写真が残されている。目録番号順にそれぞれ、竹内亮 [目録番号: ア-12-2]、江崎悌三 [目録番号: ア-12-3]、三宅宗悦 [目録番号: ア-12-4]、谷口熊之助 [目録番号: ア-12-5] である。
- (7) 奄美大島を除く部分的な行程図は『サンデー毎日』昭和 9 年 5 月 27 日号にも掲載されているが、薩南十島調査では立ち寄っていない黒島や悪石島へも行程を示す線が引かれている。行程図というよりは十島の位置関係を示す図として掲載されているように見受けられる。
- (8) 隠岐調査の行程は渋沢敬三の「旅譜」による [渋沢 1961: 434]。参加者は薩南十島調査から引き続き、渋沢、桜田、小川、早川、宮本、村上、高橋に加えて、広島から磯貝が参加したと見られる。
- (9) 祭魚洞文庫には、『十島村探訪記』(流通経済大学図書館請求記号 291.97-16) として渋沢あての谷口からの別刷がある。こちらには表紙に「渋沢様」とあり、アチック宛のものとは別になっている。

- (10) 国際常民文化研究機構共同研究グループ成果発表会「ビジュアル資料と渋沢敬三—アチックフィルム・写真からの展望—」(平成26年(2014)2月22日開催)にて須藤功氏が布されたレジュメを参考にしているが、本稿執筆時点で筆者はまだ須藤氏の保管されている資料を実見していない。祭魚洞文庫、宮本記念財団が所蔵するものと比較では早川の保管していた島々から寄せられた資料が多いことになる。早川は当時九州帝国大学におり、在京のアチック同人にくらべて薩南十島に関する資料を手に入れやすい環境であり、早川が独自に入手した資料が含まれるのではないかと推測している。
- (11) 口之島の準備資料はまだ所在が確認されていないが、調査団一行の来島時には浜に歓迎用の門をつくり、盛大に迎えていることはアチック写真[目録番号:ア-10-2]やアチックフィルムの中に見ることができる。
- (12) 流通経済大学図書館の祭魚洞文庫目録では『桜島噴火記』となっているが、原資料は、紙製のファイルにとじられ「製本を要する」と書かれており、宮本の『十島雑綴』のような形態へまとめる予定だったのであろう。
- (13) 『屋根裏の博物館』[横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所 2002:151]によれば、化石・岩石・標本等の鈴木が残した資料は北海道大学総合博物館に保管されているが、本稿執筆時点では鈴木が撮影した写真の所在・有無については確認していない。
- (14) アチックフィルム『十嶋鴻爪』の場面の特定については、『国際常民文化研究叢書8アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象[資料編]』の「DVDタイム表」記載の通し番号によった。
- (15) 『サンデー毎日』昭和36年10月29日号「屋根裏の博物館長」の誌面の中で「昭和九年、渋沢さんの手で、奄美十島の学術調査が行われたことがある。いまでこそ、各種の学術調査は大流行だが、当時農業、地質、生物、人類学者など四十人におよぶ研究者が参加した大掛かりな総合調査は、わが国はじめてのこころみだった。」とある。
- (16) 朝日新聞社データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」昭和9年5月13日東京夕刊(平成26年(2014)7月21日神奈川大学図書館よりアクセス)
- (17) 小川徹「宮本馨太郎さんの横顔—アチック時代—」<http://www.miyamoto-kinen.org/hito/yokogao.htm>(平成26年(2014)8月1日アクセス)
- (18) 刊行書目に書名が登場したものの、結果として刊行されなかった書籍には昭和11年7月の朝鮮蔚山邑達里での調査報告でアチックミュージアム編『蔚山邑達里農村見聞録雑纂』(アチックミュージアムノート第15)がある。はじめて同書が登場したのは昭和12年5月15日発行の『民具問答集第一輯』の刊行書目で、同年8月に引き続いて行われた朝鮮多島海調査の報告である同ノート第14アチックミュージアム編『北部多島海巡航備忘録』とセットで企画されたものであろう。しかし、後者は『朝鮮多島海旅行覚書』と書名を変更しておよそ2年後の昭和14年5月30日に発行されたものの、前者のアチックからの刊行はなく、戦後にはその書名すら刊行書目からは消されてしまった。同調査には東京帝大医学部の学生達とアチックから宮本馨太郎、小川徹、村上清文が参加していたが、前者の報告は昭和15年に岩波書店から朝鮮農村社会衛生調査会編として『朝鮮の農村衛生慶尚南道達里の社会衛生的調査』として出版されている。アチックからの調査報告が未刊となってしまったわけであるが、小川徹は『民族学研究』第21巻第4号にて「南朝鮮の一農村における村落生活と民具について—1936年慶尚南道蔚山邑達里調査個人報告—」としてその時の成果を発表している。それと同時に「種々の事情」によってアチック側の報告書が刊行されなかったことについても言及している。
- (19) アチックに持ち帰られて撮影された民具の写真等も含まれることから厳密に現地で撮影された写真の枚数のみを特定することは難しいと考えている。
- (20) 戦後に出版された『日本社会民俗辞典』等にも薩南十島調査のアチック写真は掲載されているが、調査から時間が経過し、撮影者の意思とは切り離されて掲載されているものもあると考えここでは該当とはしなかった。また、没後の著作集・全集などに掲載されたものも同様に該当なしとした。
- (21) 宮本馨太郎「露卯下駄の終焉」の図版[宮本 1961:40]では「(家蔵)」となっていることから、収集後に撮影されたものと見られる。
- (22) 国際常民文化研究機構共同研究グループ成果発表会「ビジュアル資料と渋沢敬三—アチックフィルム・写真からの展望—」(平成26年(2014)2月22日開催)にて小林氏が配布されたレジュメ「アチックミュージアムの研究における渋沢敬三のポジション—イトマン・移動・出漁を事例に—」による。
- (23) 『紀伊國屋書店評伝シリーズ 学問と情熱 第34巻 渋沢敬三 常民へのまなざし』DVDに収録された渋沢雅英氏のインタビューによる。

参考文献

- 谷口熊之助 1934 「十島村探訪記」『鹿兒島高等農林学校校友会報(土)』第八号別刷
 高橋文太郎 1934 「島の山と村」『ケルン』第14号 朋文堂
 三宅宗悦 1934 「薩南十島探訪挿話」『ドルメン』7月号 岡書院

- 高橋文太郎 1934 「奄美十島及大島に於る民具 一主として運搬具と仕様法一」『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社
- 早川孝太郎 1934 「踊りの着物 一薩南十島にて一」『旅と伝説』通巻第80号 第7年8月号 三元社
- 山下信一郎 1934 「南島風趣 榕樹の葉蔭に木簪の女 十島學術調査團が探訪した奄美大島十島村を語る」『サンデー毎日』昭和9年5月27日号 大阪毎日新聞社
- 早川孝太郎 1934 「薩南の黒島にて」『旅と伝説』通巻第85号 第8年1月号 三元社
- 渋沢敬三 1935 「アチック根元記(一)」『アチックマンスリー』第1号 アチックミュージアム
- 木村修三 1935 「舊川邊十島農業一覽記(一)」『農業と経済』第2巻第1号 農業と経済社
- 木村修三 1935 「舊川邊十島農業一覽記(二)」『農業と経済』第2巻第2号 農業と経済社
- 宇野円空 1935 「余の奄美十島に視たる宗教」『財団法人明治聖徳記念學會紀要』第43号 財団法人明治聖徳記念學會編
- 鈴木醇 1935 「吐噶喇火山群島を就きて(摘要)」『地質學雜誌』42巻501号 日本地質学会
- 小川徹 1935 「薩南十島 家・畑・水」『旅』第12巻第8号 日本旅行倶楽部
- 江崎悌三 1935 「吐噶喇列島の蝶類」『七高造士館生物研究會々誌』I
- 鈴木醇 1936 「吐噶喇火山群島を廻りて」『火山』第2巻第4号 日本火山學會
- 竹内亮 1936 「吐噶喇列島植物瞥見」『福岡博物學雜誌』第2巻第1号 福岡博物學會
- 三宅宗悦 1936 「奄美大島北部住民の手掌理紋の研究」『人類學雜誌』第51巻第11号 東京人類學會
- 早川孝太郎 1958 「吐噶喇列島の民具」日本常民文化研究所編『日本の民具』角川書店
- 渋沢敬三 1961 「第三部 旅譜と片影」『犬歩当棒録』角川書店
- 「屋根裏の博物館長」『サンデー毎日』昭和36年10月29日号 毎日新聞社
- 宮本馨太郎 1961 「露印下駄の終焉」立教大学史学会『史苑』第22巻第1号
- 渋沢敬三 1966 「早川さんを偲ぶ」早川孝太郎『民俗民芸双書2 花祭』岩崎美術社
- 鈴木醇先生記念出版会 1973 『鈴木醇 一人とその背景一』
- 早川孝太郎 1976 「薩南十島を探る」『早川孝太郎全集 第九巻 島の民俗』未來社
- 渋沢敬三伝記編纂刊行会 1979 『渋沢敬三 上』
- 日箇原久 1980 「渋沢敬三先生と文園彰」文園彰先生追想集刊行会『文園彰先生追想集』
- 桜田勝徳 1982 「十島巡遊 奄美大島」桜田勝徳著作集 第7巻 未刊探訪記〔Ⅱ〕・回想記 名著出版
- 渋沢敬三「二十年前の薩南十島巡り」『澁澤敬三著作集』第5巻 平凡社
- 国立民族学博物館 2001 『図説 大正昭和 暮らしの博物誌 民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』河出書房新社
- 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所 2002 『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問—』
- 前橋松造 2004 『金十丸、奄美の英雄伝説 一戦火をくぐった疎開船の数奇な運命—』南方新社
- 神奈川大学日本常民文化研究所 2009 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 1
- 神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構 2010 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 2
- 神奈川大学日本常民文化研究所 2010 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 3
- 神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構 2011 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 4
- 神奈川大学日本常民文化研究所 2011 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 5
- 神奈川大学日本常民文化研究所 2012 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 6
- 神奈川大学日本常民文化研究所 2013 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 7
- 神奈川大学日本常民文化研究所 2013 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 8
- 羽毛田智幸 2013 「渋沢敬三と横浜白楽と「鴻爪」相模民俗学会『民俗』224
- 小林光一郎 2014 「澁澤敬三が組織する共同研究—昭和九年薩南十島調査を事例に—」『日本とはなにか—日本民族学の二〇世紀』ヨーゼフ・クライナー編 東京堂出版
- 神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014 『国際常民文化研究叢書8 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象 [資料編]』
- 国立民族学博物館 2014 『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館』
- 渋沢史料館 2014 『渋沢敬三没後50年 企画展 祭魚洞祭』
- 羽毛田智幸 2015 「アチック・ミュージアムにおける出版と写真」『歴史と民俗』31 平凡社